

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(10)

守川 知子* 監訳

ペルシア語百科全書研究会** 訳注

(p.512)

第9部 鳥の驚異について

知れ。至高なる神は天使やジンや妖精をお創りになられた。それらは幽質性(laṭāfat)を強く帯びているため、何の隔たりもないかのように、ある気候帯(iqlīm)から別の気候帯へと空を移動し、幽質(laṭīf)であるがゆえに人間の視覚では捉えられない。創造主は一部の者が[それらの存在を]否定するであろうことをご存じであったがために、[目に見える形で明らかにするために]何一つ遮られることなく[自由に]空を飛ぶ鳥を創造されたのである。鳥にはより幽質[で軽やか]なものもあれば、より稠密[で重々しいもの](ṭāqīl)もいる。サヨナキドリ(hazār-dastān)やシロハヤブサ(šunḡār)のように、幽質であればあるほど、その鳴き声は優雅(laṭīf)である。また、クジャク(tāwūs)やアヒル(batt)のように、重ければ重いほど、その鳴き声はより野卑になる。

さて、大きな鳥の特性から述べていこう。至高なるアッラーは次のようにおっしゃっている。「かれらは上を飛ぶ鳥に就いて考えないのか。翼を広げ、またそれを畳むではないか。慈悲あまねき御方の外、誰がかれを支えることが出来よう」[Q67: 19]と。[すなわちペルシア語では、神は]次のようにおっしゃった。「なぜ彼らは列をなして空を飛ぶこの鳥たちに注意を払わないのか。至高至大なる神のほかに、誰が空を飛ぶ鳥を支えているというのか」と。

【第1章 大型の猛禽について】

<アンカー鳥(‘Anqā)¹⁾について。アンカー鳥とスライマーン——彼に平安あれ——との間で生じたこと>

大型の鳥の中でも、鳥たちの王たるものはアンカー鳥である。[アンカー鳥は]「スィーモルグ(Simurḡ)」²⁾とも呼ばれる。カーフの山³⁾の頂上にいる。[その]理由は、次のとおりである。

[あるとき]スライマーンが「あらゆるものごとは創造主の意志によって起こる」と言った。

アンカー鳥は「そのとおりです。それに、我々の意志によっても」と言った。

[スライマーンは]言った。「そのようなことを言うてはならぬぞ。至高なる神は、私に次のこと

* 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

** 本研究会については『イスラーム世界研究』第2巻2号(2009年、198-204頁)の監訳者による「解題」を参照のこと。2016年時点のメンバーは、杉山雅樹、塩野崎信也、小倉智史、内山隆彦、大津谷馨、角田哲朗、石川喜堂、八木啓俊、小林布由子であり、京都大学大学院文学研究科西南アジア史学研究室を中心に、同アジア・アフリカ地域研究研究科や大阪大学大学院文学研究科の院生が参加している。

1) 本書第7部に既出の霊鳥。本訳注(8)『イスラーム世界研究』第8巻、2015年、269-270頁を参照。

2) 本訳注(5)『イスラーム世界研究』第5巻1-2号、2012年、423頁、注308、および本訳注(8)、270、350頁を参照。

3) 世界を取り囲み、須弥山にも比されたカーフの山は、本書第3部の「山」に関する項目の中でも冒頭に挙げられている。世界中の「山々の母」とも目され、すべての山がこの山に連なっていると考えられていた[本訳注(4)『イスラーム世界研究』第4巻1-2号、2011年、517頁]。

を知らせた。今晚、西方で1人の娘が生まれ、東方で1人の息子が生まれた。2人は[いずれ]姦通によって交わるだろう、と。」

アンカー鳥は「私とその運命を変えてみせましょう」と言った。

「おまえには不可能だ」と[スライマーンが]言うと、[アンカー鳥は]「できますとも。証人も立てましょう。フクロウ(hāma)を証人としましょう」と言った。

スィーモルグはその娘をさらい、カーフの山の高い木の天辺に連れていった。その木の下には大海原が広がっていた。

創造主が定めた運命は次のようなものだった。(p.513)かの男児は商人になり、その[海の]岸辺にやってきた。高い木が彼の目に入り、その上には巣があった。そこには美しい娘が座っていた。「君は誰だ」と尋ねると、[娘は]「私の母はスィーモルグよ」と答えた。「おお、娘よ、君はこの木の上で怖くはないのか。そのうち風が吹いて、君は海に落ちてしまうだろう」と彼は言った。

[娘は]言った。「私はどうすればいいの?」

「ここに馬の死体がある。私はこいつの腹の中に入ろう。スィーモルグが来たら、この死体を君のところまで運ぶように頼んでくれ」と彼は言った。

「いいわ」と[娘は]答えた。

この青年は馬の腹の中に隠れた。スィーモルグが帰ってくると、娘は言われたとおりに頼んだ。スィーモルグは馬の死体をその娘の前に置いた。スィーモルグが出かけるたびに、彼はそこから出て娘と一緒に過ごした。ついに娘は妊娠した。スィーモルグの翼の音が聞こえると、彼は馬の腹の中に隠れて[やり過ごして]いたのである。

そこでスライマーンはスィーモルグに言った。「創造主が運命とお定めになったことが果たされた。行って、その娘を連れてこい。」

スィーモルグは[娘のもとに]来て、「おまえをスライマーンのもとに連れていくぞ」と言った。

「どのように私を運ぶのですか?」

「おまえを嘴でくわえよう。」

娘は言った。「私は海が怖いし、嘴でくわえられては疲れてしまいます。この馬の中に私を[入れて]そこまで運んでください。」

「よかろう。」

娘は馬の中に入った。アンカー鳥はそれを持ち上げ、スライマーンの前に置いた。スライマーンは言った。「おお、息子よ。おお、娘よ。出てきなさい。」

2人はそこから出てきた。スィーモルグは恥じ入って、良いことも悪いことも、起こりうることのすべては創造主の意志による、ということ認めるにいたった。スィーモルグはカーフの山へと去った。以来、スィーモルグを見た者はいない。フクロウもこのことを恥じて、日中は外に出ようとせず、夜になると嘆きの声をあげる。

<逸話>

スィースターンの王はスィーモルグを見たいと思った。ヒンドゥスターンの境域の端まで行き、スィーモルグについて尋ねた。「スィーモルグは決まった時にラームニーの島⁴⁾へ来る」と人々は言った。彼は期待を抱きつつ、その場所へたどり着いた。頂上が天に達するほどの山が見え

4) スオウ(蘇芳)の自生地として名前の挙がるラームニーの島(現在のバンダ・アチェの辺りと推定)については、本訳注(6)『イスラーム世界研究』第6巻、2013年、550頁、注5を参照のこと。

た。その頂上には巨木があり、天辺にはアンカー鳥の巣があった。(p.514) 彼が身を潜めていると、スィーモルグが現れた。空を見ると一面が極彩色で覆われ、その翼からは竖琴や〔笛〕や様々な楽器の妙なる調べや音色が鳴り響いていた。風切り羽(sāh-bāl)からは炎がきらめいていた。〔それはまるで〕楽士たちが楽器を奏でる中、飾り立てられた庭園が空中を進んでいるか、あるいは〔空中に〕楽園が現出したかのようだと王は思った。芳しい香りが漂い、その翼からは10万もの黄金の環が〔きらきらと〕立ち上った。スィーモルグは巣に降り立つと、かぎ爪から一匹のワニを放した。王は、その威容にただただ驚嘆した。ヒンドの人々が言うには、「アンカー鳥が突然この巣にやってくる時にはいつも、ライオンも竜(aždarhā)もサイ(kargadan)も、この鳥を恐れて我々の地方からいなくなる。すべてを食べてしまうからだ」とのことであった。

〔アンカー鳥は〕強靱で、恐れられている鳥である。この鳥の話については、医学の章でその驚異や驚きを語った⁵⁾。ここではこの程度で十分であろう。

<オオワシ(‘uqāb)について>

オオワシは大きな鳥で、黒く、力がある。あらゆる鳥がオオワシを恐れる。身のすくむ声で鳴く。かぎ状になった〔鋭い〕嘴を持ち、くわえたあらゆるものを引き裂いてしまう。串のように〔尖った〕かぎ爪で相手を傷つける。胸で一撃を加えて、騎手を落馬させることもある。ある者が次のように言っている⁶⁾。「1羽のオオワシが群れから羊を1頭さらおうとした。群れの犬がオオワシに向かって吠えたとすると、羊を放し、犬をさらって空に舞い上がった。犬は吠え続けていたが、オオワシは犬を空高く連れていき、とうとう犬の声は聞こえなくなってしまった。そこで〔オオワシは犬を〕放した。犬は地面に落ちて死んでしまった。」

<逸話>

バッシュャール(Baššār)⁷⁾は、「もし動物のうちのどれか1つになれる選択権を創造主があなたに与えたなら、あなたは何を選ぶか」と尋ねられた。彼は、「オオワシになることを選ぶ」と答えた。「なぜか」と尋ねられると、こう答えた。「なぜなら、オオワシの地位は〔他の動物より〕高いからだ。誰もその巣にたどり着くことはできない。寿命は長く、あらゆる鳥に恐れられている。ライオンに襲いかかるほどの猛々しさも有している。夜に羽ばたくと、その両方の翼から (p.515) 火花が散る。」

オオワシの卵は大きく、産卵時に苦勞する。〔そこで〕雄はヒンドウスターンの地から、ヒンドのナツメヤシの実のような石⁸⁾を持ってくる。雌はそれを見るや否や〔卵を〕産む。人々はその巢から〔その石を〕手に入れる。オオワシは雛をすぐに〔巢から〕追い出してしまうが、「骨を砕く鳥

5) 医学の章は、本書第7部第7章にあたるが(本訳注(8)、333-349頁)、アンカー鳥やスィーモルグに関する記述はない。

6) この話は既出である〔本訳注(8)、269頁〕。

7) 8世紀に活躍したバスラ出身の盲目の詩人、Abū Mu‘ād Baššār b. Burd(784/5年頃没)のことか。祖先はもともとイラン東部出身であり、彼もまたその文化的伝統を受け継ぎ、シュウビーヤ運動でも活躍した。辛辣な性格でも知られ、史料には敵対者に対して激しい中傷を行っていたことが記録されている。アッバース朝のカリフ、マフディーによってザンダカ主義の嫌疑をかけられ獄死した〔EI: Baššār b. Burd〕。なお、『動物誌』では彼の詩が数多く引用されている〔Jāhiz, Kitāb al-ḥayawān, vol. 1, p. 183他〕。

8) 本書第3部第4章「石と鉱物の驚異について」の「黄疽の石」に関する説明の中に、同様の記述がある〔本訳注(4)、533-534頁〕。

(kāsir al-‘izām)]⁹⁾がその雛を育てる。雛は成長すると、両親のもとに戻ってくる。

夢に現れるオオワシは、圧制を行う支配者(スルターン)を示す。ライオンはオオワシに向かって吠え、オオワシと戦う。オオワシは32日間、卵を抱えて温める。他の大型の鳥たちはいずれも22日間である。また、ワシ(aluh)が老いると、子どもたちが抱えて休み休み飛ばせていく。老ワシ(aluh)の目が見えなくなると、清水の泉に行く。そして、その周りを、円を描きながら上昇していく。すると、熱により羽が焼けて[再生し]、目も見えるようになる¹⁰⁾。その後、泉に何度か入ると若返る。オオワシは嘴が伸びると狩りができなくなり、そのために死んでしまう。何を捕らえても、いち早くその肝に喰らいつく。ライオンの気性を有している。

言われているところでは、オオワシは、あるときは雄で、あるときは雌である。ハイエナ(kaftār)は、1年間は雄で、1年間は雌である。カシ(balū)の木は、1年間はドングリ(カシの実)がなり、1年間は没食子(māzū)がなる。イノシシ(hūk)の子は縞模様で、「山の牛(gāw-i kūhī)」の子には斑点があるが、大きくなると縞[や斑点]は消えてしまう。

<骨を砕く鳥(ヒゲワシ)(kāsir al-‘izām)>

骨を砕く鳥は灰色の大きな鳥である。雛を可愛がり、ハヤブサ(ṣaqr)の雛を連れてきて育てるほどである¹¹⁾。創造主はこの鳥の喉元に2つの骨(歯)を創造された。そこには頑丈な歯が隆起している。骨が喉を通るときには、力を入れてその骨を噛み砕き、砂土のようにしてしまう。その骨(歯)は、力ずくで叩き壊そうとしない限り、金属でも容易に壊すことはできないほどのものである。それは、サソリの針で大釜を突いて穴を開けるようなものである。つまりは、この鳥の首元には骨を砕くという特性が備わっているのである。創造主は様々な権能を有されるがゆえに、喉に歯のあるこのような鳥を創造されたのである。

(p. 516) <ハゲワシ(nasr)について>

ハゲワシは[ペルシア語では]「カルガス(kargas)」である¹²⁾。弱いものも強いものもある。稠密[で重々しい]鳥である。大喰らいで、[自分の]翼では飛べなくなるほど食べる。そうなると何度も飛び跳ねては落ちることを繰り返す。やがて段々と上昇し、風を翼の下に取り込む。こうして飛翔できるようになる。恐るべき鳴き声をあげる。ハゲワシの最大の武器は鳴き声と力である。目が見えなくなると、人間の胆嚢を探し求め、目に擦りつける。すると目が良くなる。

ハゲワシのかぎ爪は雄鶏のかぎ爪のように鈍く小さいが、大胆かつ勇敢である。何ものをも恐れませんが、弱々しいはずのコウモリ(huffāsa)だけは別である。雌のハゲワシはプラタナスの葉で巣を作る。というのも、コウモリがプラタナスの葉を恐れるからである。コウモリがプラタナスの木にとまると死んでしまう¹³⁾。

9) 骨を丸呑みできるヒゲワシを指すと考えられる。本文中の次項も参照。

10) 本書第8部では、ハゲタカ(ハゲワシ)が天高く飛んで翼を太陽にあてて焼き、温かい土に羽を擦りつけて新しい羽を手に入れることが記されている[本訳注(8)、334頁]。

11) 本書の前項「オオワシ」やジャーヒズの『動物誌』、イブン・クタイバの『諸情報の泉』では、「骨を砕く鳥(ヒゲワシ)」が育てるのは「オオワシの雛」とされている[Jāhiz, *Kitāb al-ḥayawān*, vol. 2, p. 159, vol. 3, p. 180, vol. 6, p. 338; Ibn Qutayba, *‘Uyūn al-ahbār*, vol. 2, p. 109]。しかし、本書の上記翻訳箇所や「ハヤブサ」の項では、「ハヤブサの雛を育てる」とされており、若干混乱がみられる。いずれにせよ、ワシが雛を追い出し、ヒゲワシがその雛を育てるといった話の基本情報はプリニウスの博物誌であろう[プリニウス『プリニウスの博物誌』(中野ほか訳)、1巻436頁]。

12) 本訳注では、これまで慣例に従いペルシア語の kargas を「ハゲタカ」と訳してきたが、今回すべてを「ハゲワシ」に改める。

13) コウモリがプラタナスの葉を恐れることについては、本訳注(6)、554頁参照。

次のように言われている。スライマーン——彼に平安あれ——は、1羽のハゲワシが大トカゲ(dabb)と会話をしているところに出くわした。ハゲワシが「驚くべきものを見たぞ。2本足で移動し、食べ物を手で口に運び、話をする生きものだ」と言うと、大トカゲは言った。「もし君の言うとおりなら、そいつは私を海の底から引き上げて、君を空から引きずり落とし、世界を手に入れるだろう。そいつがいる限り、どんな生きものも権勢を振るうことはあるまい。」

次のように言われる。ハゲワシは300ファルサングほども上昇する。また、ハゲワシは持って生まれた特性から、麝香の香りを発する。これは、ヤツガシラ(hudhud)が[生来の]特性によって悪臭を放つと同じである。良い香りがする理由として、ハゲワシは鹿(ジャコウジカ)を食べるが、[そのまま鹿の]麝香嚢を食べてしまうからである、と言う者もいる。

<ホマー鳥(Humā)について>

ホマーはめでたい鳥で、[バラサーグーン]¹⁴⁾地方にいる。ある期間ごとに現れ、町の周りをまわる。そのとき誰かの頭上にとまると、その年は豊作になる。そこで(p.517)人々は、ホマー鳥が頭上にとまった者を王にして、その者に帝王権を与えることで一致した。しかし、それから長い間ホマー鳥は姿を現さなかった。ある日、1人のヒンド人が別の男と連れ立って歩きながら言った。「もしホマー鳥が私の上にとまったら、[バラサーグーン]地方を破壊してやろう。」

連れの男は言った。「もし私の上にとまったら、王国を繁栄させよう。」

ホマー鳥が降りてきて、[最初の]ヒンド人の頭上にとまった。町の人々はそのヒンド人を帝王にした。[ヒンド人は]世界中を破壊していった。ある日、くだんの友人がヒンド人に言った。「[神の]被造物を慈しんでやれ。」

ヒンド人は次のように答えた。「私は神の怒りだ。[神は]私に力を与えたのだ。もし神の被造物がよき意思を實踐していたならば、おまえの上にとまっていただろう。[しかるに]彼らは悪しき意思を持っているからこそ、必然的に[ホマー鳥は]私の上にとまったのだ。」

<ダチョウ(ni'āma)について>

ダチョウ(šutur-murg)は鳥の体をしているが、足だけはラクダの足である¹⁵⁾。だが鳥のように飛ぶこともなく、四足獣のように走ることもない。顔を風に向け、胸で風を切り、足で駆け、翼を羽ばたかせる。飛翔と疾走の中間で、矢が追いつかないほどの速さがある。また、ダチョウは鳥たちと共生することも、四足獣たちと穏やかに過ごすこともない動物である。臆病な動物(nawāfir)の部類に入る。[しかし]狼を捕らえる。雄と雌とで1頭の狼を殺す。他の四足獣や二足獣は足が1本折れても残りの足で立っていることができるが、ダチョウは足が1本折れると倒れてしまう¹⁶⁾。[雄の]ダチョウが狼の背に乗り、雌がその後ろに現れる。[雌が]狼を走らせ、[雄が]突き、ついには殺してしまうのである。

また、ダチョウは石やメノウ(jaz)を飲み込む。メノウはダチョウの腹の中で溶けて液体になる。メノウは10年間火の中で燃やしても燃え[て溶け]ることはない。これは[ダチョウの]胃の特性であり、犬や狼の胃が骨は消化してもナツメヤシの仁は消化しないのと同じである。また、馬はア

14) バラサーグーンは本訳注(5)、457頁で既出。9世紀から13世紀にかけてのカルルク、カラ・ハン朝、カラ・キタイ(西遼)の中心都市。現在のキルギスのチュール川流域にあるプラナ遺跡に相当するとされる[「バラサーグーン」]『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年。

15) ペルシア語でダチョウを示す“šutur-murg”の語義は「ラクダ鳥」である。

16) この一文は錯簡であろう。

カシア (umm-i gaylān) を消化するが、大麦は消化しない。

ダチョウはまったく違いのない30個の卵を一直線に並べ[て産む]。(p.518)そして自分[の体]を伸ばして、すべての卵を包み込む。とはいえ、自分の卵を放置して他のダチョウの卵の上で眠ることもある。[ダチョウは]視覚によって生きる鳥である。人間と同様に目の上下にまつげがある。卵の一部は腹の下に抱えるが、一部は土の中に埋める。そして1つ1つに穴を開け、そこに虫を落とし、雛に餌として与える。太陽に晒したものを食べ、しばしば石や砂を食べる。自分の影を恐れるため、影を目にしないように太陽に向かって走っていく。寒くなり始めてナツメヤシ[の実]が赤くなると、ダチョウの足も赤くなる。ダチョウの卵の殻を酢の中に入れると、酢が沸騰する。鍋の中に入れると、わずかな火でも沸騰する。ダチョウは火を好むため、人々は火を用いてダチョウを狩る。ダチョウは宝石を目にすると、奪い取って食べてしまう。人間の耳ごと引きちぎって耳輪を奪うほどである。体格ではオオワシやトビ(zīgān)やハゲワシに勝る。

<珍しい鳥>

ヤーギース鳥(YAĠĪS)はイスカンダリーヤの向こう側にいる鳥である。木の上にとまり、羽根を飛ばしてくるが、1枚1枚の羽根が矢のような傷をつける。30羽の雛を育てる。1本の尾を背中のお尻で広げ、雛たちを尾の上に載せて移動する。雛たちが大きくなり、飛ぶことができるようになるまで[尾に載せて]運ぶ。この鳥は人の暮らす場所にはいない。人を殺す恐れがあるため、[人々が]近づかせないからである。

<ハヤブサ(ṣāqr)について>

ハヤブサは力があり、練達した鳥である。ハヤブサの武器は胸であり、胸で攻撃を仕掛けてくる。高速で飛ぶことができ、1時間で200ファルサング進む。大喰らいである。ハヤブサは満腹になると飛べなくなるため、人々はハヤブサを満腹にさせてから捕らえる。雛は3羽である。[親鳥は育てるのが]困難なため1羽を追い出す。「骨を砕く鳥」がその雛を育てる¹⁷⁾。ハヤブサの鳴き声は恐ろしく、口から(p.519)悪臭を発する。ライオンとハヤブサには悪臭という特徴がある。

<トビ(hid'at)>

トビは[ペルシア語では]「ザガン(zāgan)」と呼ばれる。死肉を食べ、カラスとは敵対関係にある。トビの卵が[カラスの卵と]すり替えられた状態で雛が孵ると、[トビは雛が]自分とは同種ではないことに気づき、けたたましく鳴いて他のトビを集める¹⁸⁾。[集まったトビは母親である]雌のトビを殺す。トビは下劣な鳥である。トビの卵は白い。それに対して、カラスの卵は斑である。

<ノガン(hubārā)>

[ノガンは、ペルシア語では]「チャルズ(čarz)」¹⁹⁾である。肉食の猛禽で、ハヤブサの敵である。

17) 『諸情報の泉』には、「通常オオワシは3つの卵を生み落とす。雛が孵ると、そのうち2羽に餌を与え、1羽を追い出す。そして『骨を砕く鳥』がその雛を世話する」というよく似た記述がある [Ibn Qutayba, 'Uyūn al-ahbār, vol. 2, p. 109]。本書の記述はこれに基づき、オオワシをハヤブサに置きかえたものであろう。先のオオワシの項および前掲注11も参照のこと。

18) 1097-1102年頃に編纂されたペルシア語百科事典『高貴なる歓喜の書(Nuzhat-nāma-yi 'alā'ī)』にある同様の記述に基づき、補って訳した [Šahmardān b. Abī al-Ḥayr, Nuzhat-nāma-yi 'alā'ī, Ed. F. Jahānpūr, Mu'assisa-yi muṭāli'āt wa taḥqīqāt-i farhangī, Tehran, 1362s.[1983], p. 138]。

19) 校訂テキストでは「jawzahar」すなわち「gawzahar」とあるが、巻末の訂正表に従う。

ノガンはハヤブサに見つかり、[一旦]逃げてから上昇する。そして、ハヤブサに向けて糞をすする²⁰⁾。ノガンの腹の中には粘着性の塊があり[それを糞として落とすのである]。ハヤブサはその糞を浴びると、羽がくっつき、身動きがとれなくなってしまう。すると数羽のノガンが集まってきて、ハヤブサの羽をむしり取り、死に至らしめる。

「ノガンの武器は糞である」と言われるが、それは[イタチ(zarābī)]の武器が放屁(fusā)であるのと同様である。動物たちはその悪臭から逃げ出す。イタチが大トカゲの巣に入ると、一度の放屁で大トカゲは死んでしまう。ノガンに糞という武器があるように、取るに足らない男でも、口やかましい妻や噛み癖のついた犬という武器を持つ、というたとえがある²¹⁾。

言われているところでは、ノガンは羽毛が一度に抜け落ち、ゆっくりと生え変わる。[羽毛がないことを]嘆いて死んでしまうこともあるという。ノガンは美しい色をしており、生まれつき気高い鳥である。バスラでは、人々はノガンを捕らえ、その素囊(hawšala)から「緑の種(habbat al-ḥadrāʾ)」を手に入れる²²⁾。

ノガンは威厳ではハヤブサに劣るが、策略によってハヤブサを死に追いやる。

<タカ(bāzī)>

タカは[めでたく]かつ優雅な鳥であり、気性が荒い。創造主がお創りになったものはみな、雌に比べて雄の方がより大きく、より完全である。しかし、タカだけは例外で、雌の方が雄よりも大きく、美しい。(p. 520) タカには、王たちに備わっている気品があり、威圧感のある目をしている。タカの瞳は黄色く、大ハヤブサ(ḥarḥ)とBHLH²³⁾のそれは黒色である。タカは慣れ親しんだ山の頂上や木の上にいるか、あるいは王たちの腕にとまっている。足で狩りを行う。注意深く利口で、焼いた肉も生肉も食べる。この鳥を[飼うときには]埃や煙から守ってやらなければならない。オオワシがタカと交わると、その卵からは大ハヤブサが生まれる。大ハヤブサがタカと交わると、BHLHが生まれる。つまりは、忠実な鳥である。というのも、獲物をとって戻ってくるのだから。

[逸話]

私は次のように聞いた。スルターン・マスウード——アッラーの慈悲が彼にあらんことを——がビヒストーンの近くにいた[とき]、1羽のキジ(taḍarw)を目にして言った。「ああ、タカがいればよかったのに。そうすればこのキジを捕まえることができたのに。」

創造主のお定めによって、1羽のタカが現れ、彼の腕にとまった。彼はそのタカをたいそう可愛がった。ある日、彼はタカを連れて狩りに出かけた。強い風が巻き起こり、タカはどこかへ行ってしまった。スルターンはふさぎ込んで帰ってきた。3日後、スルターンが天幕の入り口のところにいると、タカが上空から舞い戻り、スルターンの腕にとまった。

[この話の]意味するところは、タカは帰巢能力(ihtidā)を有し、利口で器用な上に忠実である、

20) 以下の内容については、『動物誌』の中に同様の記述がある[Jāhiz, *Kitāb al-hayawān*, vol. 7, p. 60]。

21) 同様のたとえは見つからなかったが、ペルシア語には、「壊れた壁、口やかましい女、獐猛な犬の3つは避けよ」「口やかましい女は鎖のない犬」ということわざがある。

22) この一文については、『動物誌』の中によく似た記述がある[Jāhiz, *Kitāb al-hayawān*, vol. 7, p. 60]。なお、「緑の種(habbat al-ḥadrāʾ)」はカイノキ属の植物の実、あるいはインドアサの実を指すが[LN: hubbat al-ḥadrāʾ, hubba-yi ḥadrāʾ]、ノガンとの関連は明らかではない。

23) 猛禽類の一種を指していると考えられるが、辞書にふさわしい意味はなかった。なお、この単語は現在では、鷹狩用の手袋を指す名詞、または猛禽類を数えるときの数詞として使用される。

ということである。タカは白ければ白いほど優れている。また、糞によって各々の技能を押し量ることができる。糞をより遠くに飛ばすほど、そのタカの価値は高くなる。

肉や血を食べる猛禽については、この程度のことを述べておこう。次に、種子や虫を食べる鳥について言及しよう。

〔第2章 種子や虫を食べる〕鳥について

＜サギ(hawāsil)について＞

サギは大きな水鳥である。バスラとワースイトの〔バターイフ〕湿地²⁴⁾に生息し、テュルクの国々やヒンドの国々にはいない。きわめて白く、〔肉は〕柔らかい。その皮から上衣(farw)が作られるが、それは体温をよく保つ。孵った当初の雛の羽毛は黒いが、やがて乳のように白くなる。サギの素囊は大きく、〔素囊を〕虫や水で一杯にした後、吐き戻して食べる。

(p.521) ＜ハト(hamām)について＞

ハトは〔ペルシア語では〕「カブータル(kabūtar)」である。人懐っこい鳥で、広く人々から愛されている。ハトは利口であり、性欲が強く多くの子を産む。帰巢能力を養うと、100ファルサング〔離れたところ〕からでも帰ってくる。交尾の際、〔雄と雌は〕嘴を重ねて性交(zuqqa)する²⁵⁾。嘴による交尾で生まれた卵〔の中〕には雛(farh)がない。カラスも嘴による交尾で卵を産むが、〔その卵の中には〕雛がいる。

遠く離れた場所から手紙をもたらすハトには、100ディーナールの値がつくこともある。雛が20ディーナール、卵が5ディーナールになることもある。夜には星々を頼りに飛び、風によって南北を見分ける。翼を腕のように使って戦う。ハトはタカやハヤブサ(sāhīn)よりも俊敏であるが、これらの鳥を恐れる。タカやハヤブサは急降下してハトを捕獲する〔からである〕。伝書鳩には雄が用いられる。雄の方が強靱で、より早く雌のところへやって来るからである。一瞬にして世界の果てから果てまで移動することができる。

ハトは長い間留め置かれたり、翼を切られたりしても、〔羽が〕再び生え揃えば、元の場所に戻ってくる。〔しかし〕翼を片方だけ切られると、〔飛ぶことが〕できなくなる²⁶⁾。片腕を失った人間は走ることができないと同様である。〔片腕の〕ナバータ・ブン・アル＝アクタウ(Nabāta b. al-Aqta'²⁷⁾)は戦場で刀を振ったものだった。刀がうまく当たれば、彼はそのまま立っていることができたが、仕損じた場合には、ナバータは顔から地面に倒れ落ちたものだった。

＜問答＞

24) ティグリス・ユーフラテス川下流域の湿地帯〔本訳注(4)、484頁、注16〕。

25) 原文は“būsa nihad wa zuqqa kunad”であり、zuqqaは本来「親鳥が嘴で雛に餌をやること」を意味するが、巻末の訂正表に指摘があるとおり、本書の著者はこの行為をハトの交尾の一種とみなしていたようである。同じような表現は、後述の「カラス(gurāb)の項」にもある。

26) 『動物誌』の「ハトの翼の切断」の項によく似た記述がある〔Jāhiz, Kitāb al-hayawān, vol. 3, p. 230〕。

27) この人物についての詳細は不明。ジャーヒズの『動物誌』ではナバータ・アル＝アクタウとされ、よく似た逸話が書かれているが、ナバータ本人については片腕の勇者であったということしかわからない〔Jāhiz, Kitāb al-hayawān, vol. 3, p. 231〕。

次のように尋ねられたとしよう。「天使には70枚前後の翼がある。『2対、3対または4対の翼を持つ[天使]』[Q35: 1]という至高なるお方のお言葉にあるように。2枚または4枚の翼、あるいは400枚の翼は偶数であり、バランスという点でも妥当である。しかし、3枚や5枚の翼は奇数であり、あり得ない[のではないか]と。

〔それに対しては〕次のように答えよう。「3という数字は4という数字に含まれている[から問題はない]のだ」と。または、「創造主は鳥を3枚の翼で飛ばせることも可能である。サイヤ『ヒンドのロバ(ユニコーン) (ḥar-i hindī)』には角を1本だけお創りになり、魚には7枚のひれをお創りになったように」と答えよう。なお、コウモリは羽がなくとも飛ぶことができ、ムクドリ(zurzūr)は飛ぶことはできても、決して歩くことはできない²⁸⁾。

ハトは女たちの目につくところで飼うべきではない。性欲を喚起するからである。[ハトが]嘴を重ねて性交するのを見ることで、萎えていた性欲が活気づいてしまう。

ハトの聡明さについては次のように言われている。(p.522) バーバウイフ(Bābawayh)²⁹⁾は言う。「私は飛べるハトのつがいと、[羽を]切られ[て飛べないハトの]つがいを1組ずつ所有していた。私(バーバウイフ)はスルターンによってしばらく投獄され、その後釈放されたが、その間にも羽を切られたハトの雛たちは成長していった。私は言った。『アッラーに讃えあれ。この雛たちは[両親が]飛べぬというのに、何を食べ[て育っ]ているのだろうか?』

しばらくすると、飛べる方のハトが戻ってきた。羽を切られた方の雛は2羽とも駆けていき、飛べる[ハトの]嘴をついばんで、口移し(zuqqa)で餌を摂っていた。」

<逸話>

次のように言われている。ある王が美しい女奴隷を購入した。しばらくの間、王は彼女とともに過ごしたが、彼女は男と目を合わすことすらできなかった。困った王は、「このような状態である。この女奴隷の性欲は萎えてしまった」と医者に相談した。医者は、「彼女が暮らす建物の中でハトのつがいを飼うようになさい」と指示した。王はハトのつがいを彼女のもとに送り届けた。女奴隷は、雄が雌と嘴を重ねてじゃれあったり(zuqqa wa taqbīl)交尾したりするのを眺めていた。[すると]萎えていた女の性欲が活気づき、男を求めるようになった。

知れ。ハトはアラビア語で「案内人(hādī)」と呼ばれる。最良のハトは濃青色のものであり、[次は]焦げたように黒いものである。白は虚弱である。ハトは老いると、嘴を重ねることをやめる。2羽の雌がつがいとなって4つの卵を産むこともあるが、雛が孵ることはない。また、その卵は雷鳴によって溶けてしまう。ハトの雛のうち最良のものは春か秋に[生まれた]もので、冬や夏に[生まれた]ものは良くない。1年に1度、雄と雌を互いに離ればなれにすると、[雄と雌は]互いに恋しくなり、[雌同士がつがいのように]卵を無駄にすることもなくなる。

ハトには、コロハ草[の種子](ḥulba)やヒメウイキョウ(zīra)やアニスの実(nān-ḥwāh)が効く。[乳香(kundur)]を鳩小屋の中で焚くと、効果がある。タイム(sa'tar)や乾燥イチジクを砕いてハ

28) この箇所は、前後の文脈を把握し難い。ジャーヒズの『動物誌』によると、コウモリとムクドリの説明の間に「完全な翼を持つのに飛べない鳥もいる」という文章が入る [Jāhiz, *Kitāb al-ḥayawān*, vol. 3, p.233]。本書ではこの文章が省略されてしまったため、文意が取りにくくなったと考えられる。

29) 10世紀の著名なシーア派法学者・伝承学者のイブン・バーバウイフ(イブン・バービーヤ)(991/2年没)を指すか。なお、この箇所はバーバウイフの一人称と三人称が混在しているが、一人称で統一して訳出する。

トに与えると、鳩小屋から離れなくなる。ハトの翼に金の指輪で焼き印をすると、その鳩小屋から飛び立たなくなる。これは金の性質であって、指輪のためにそうなるのではない。数束のヘンルーダ(sudāb)を鳩小屋の中に置くと、テン(dala)や猫や蛇がそこに近づくことはない。ハトの血を日陰で乾燥させ、すり潰して目に入れると、(p.523)視力の衰えや夜盲を解消する。ハトの肉は、元からあるその特性によって胃を傷める。

<雄鶏(dik)について>

雄鶏は[ペルシア語では]「ホルース(hurūs)」である。優雅(laṭīf)で優美な鳥であり、立派な飾りを身にまとっている。冠(とさか)と耳飾り(耳朶)とあごひげ(肉髯)があり、勇敢で自尊心が強く、性欲旺盛で、たくさんの雌をはべらせる。寛容であり、餌を雌に分け与える。夜にはあまり眠らず、時間を[正しく]認識している。雄鶏の気性は攻撃的である。嘴とかぎ爪には毒がある。そのため、雄鶏に嘴で目を突かれたスママ・ブン・アル＝アブラシュ(Tumāma b. al-Abrāš)³⁰⁾は、それが原因で死んだ。

[逸話]

軍鶏を所有している者がいた。ある男が「そいつを私に売ってくれ」と頼んだが、「犬と戦わせるために、[軍鶏は]質として持って行かれたよ」と答えた。しばらくして、[犬に勝った]軍鶏が戻ってきた。男はかなりの金額で[軍鶏を]購入し、家に連れて帰った。[とたんにその軍鶏は]娘の目に跳びかかり、彼女の目を潰してしまった。

<逸話>

イヤース・ブン・ムアーウィヤ(Iyās b. Mu‘āwiya)³¹⁾は1羽の雄鶏を見て、「この雄鶏は老いているな」と言った。「なぜわかるのですか」と尋ねられると、「種を食べているからだ。もし若い雄鶏であるなら、[種を]雌に与えたであろう」と答えた。

[雄鶏の寛大さは]「彼は[種を捨てる者](雄鶏)よりも寛大だ」というたとえに用いられる。雄鶏はクジャク(ṭāwūs)よりもすばらしい。とりわけナバティア³²⁾のものは[良い]。雄鶏に対して鳴き声を[まねて]叫ぶと、雄鶏は激しく突いて追い立ててくる。また、家の中で白い雄鶏を殺すと、その家は必ず不幸に見舞われる。雛の嘴をつかんで吊るし、おとなしいと雌鶏で、暴れるようであれば雄鶏である。

<逸話>

次のように言われる。タカが雄鶏に言った。「おまえは家の中で育てられる。[だが人間が]手を伸ばせば、おまえは跳んで逃げて、金切り声をあげる。[一方、人間は]私を偉大なものと考えて

30) アッパース朝初期に活躍したムウタズィラ学派の神学者 Abū Ma‘n Tumāma b. Ašras al-Numayrī (828年没)のどこか。バグダードの同学派内で大きな影響力をもち、アッパース朝カリフ、ハールーン・アル＝ラシードとマームーンとも親しい関係にあった。『動物誌』の著者ジャーヒズの師の一人としても知られる [Swartz, M., *A Medieval Critique of Anthropomorphism: Ibn al-Jawzī's Kitāb Akhbār as-Ṣifāt*, Brill, Leiden, Boston & Köln, 2002, p.118; *Encyclopaedia of Islam* (First Edition): Tumāma b. Ašras].

31) 北アラブ部族のムダル族の長。本訳注(8)、276頁、注15参照。

32) アラビア半島北部を指す地方名。ペトラを中心とした独自の文字や文化をもつナバティア王国(前169-後106年)があった。本訳注(5)、469頁参照。

いる。私は彼らのために狩りをするからな。」

(p.524) 雄鶏は言った。「タカであるおまえは、そのような[私の]ことを恥さらしだと思っているのかもしれないが、雄鶏である私に言わせれば、おまえは私よりもすぐに逃げる臆病者だ。」

すなわち、雄鶏は雄鶏と戦い、負けたものが勝ったものに犯される[からである]。ラクダも同様のことを行い、負けたものが犯される。

ナスル・ブン・[サイヤール] (Naṣr b. [Sayyār])³³⁾は言った。「テュルク人たちが言うには、帝王たらんとするためには、王には6つの特質が備わっていなければならない。すなわち、雄鶏の勇敢さ、雌鶏の柔和さ、ライオンの大胆さ、イノシシの突進力、狼の狡猾さ、キツネのずる賢さである。」

知れ。夢で見る雄鶏はアジャム人を意味している。ウマル・ブン・アル=ハッターブは[雄鶏の]夢を見て、「[夢で]雄鶏が私を嘴で何度も突いたことを、アジャムの男が私を殺すだろうと解釈した」[と]言った。結局のところ、アブー・ルールーが彼を殺し[ウマルの夢解釈的中し]た³⁴⁾。

隊商の中に白い雄鶏がいれば、ライオンがそのまわりをうろつくことはない。雄鶏の鳴き声は、病人に効能があり、朝の訪れという吉報をもたらす。裸の女が白い雄鶏を腕に抱え、ヒメハギ(šīr)の生えている野をめぐると、この草は枯れてしまう³⁵⁾、とされている。

雄鶏は去勢すると[肉が]柔らかくなる。雄鶏の去勢は、次のように行われる。その鼠径部の腿の付け根を尖ったナイフで開き、指を入れて、後ろから両方の睾丸を掴んでちぎる。暴れないように一昼夜世話をすると、快復する。その肉のスープ(maraqā)は、元来の性質により、下痢に効く。雄鶏を走らせると、その肉は柔らかくなる。

<雌鶏(dajāj)について>

雌鶏は益に満ちた鳥であり、子が多いが、非力で愚かである。10年間小屋の中にいた雌鶏が外に出ると、日が沈むほど遅くまで歩き回り、小屋への道を見失う。いかなる敵からも自身を守ることはできない。1匹のネズミ(mūs)が動いただけで不安がって鳴き出してしまう。雌鶏は警戒しているときは棚の上や丸屋根の下に行く。雌鶏は幼い時分には優美で敏捷である。300個の卵を産み、[それを]放置しては、その後で探し求めて鳴く。体の下に卵を5つ(p.525)置いてやれば満足し、卵の上に座って17日経つと雛が孵る。[産み落とされた]最初の日に卵を割ると、3つの点がある。[それは]心臓と脳と肝臓である。卵黄の中央に位置し、他の点よりも大きいものが心臓である。その後、血管がつながっていき、次に頭が現れ、その次に翼が現れる。全体ができあがると、卵の殻を割って[出てくる]。この[雛]鳥は卵の中では丸く折れ曲がっており、頭を右の翼の下に入れ、左の翼の下で足をまっすぐに伸ばして、クルミのように丸まっている。卵から孵ると、身体を伸ばして立ち上がり、すぐに種をついばみ始める。

33) ウマイヤ朝末期のホラーサーン総督 Naṣr b. Sayyār al-Layṭī al-Kinānī (748年没)のこと。彼はホラーサーンやマラーナフルで軍事・行政両面で長く活躍した後、738年に74歳でホラーサーン総督に任命された。テュルク系のトゥルギシュによる襲撃や、彼らと同盟した al-Hārit b. Surayj の反乱に悩まされながらも、税制改革を行って非アラブ・ムスリムの不満解消に努めるなど、ウマイヤ朝末期の東方領域安定に重要な役割を果たした。しかし、748年にアブー・ムスリム率いる革命軍の前に敗走を余儀なくされ、イランのサーヴェで病死した [EI²: Naṣr b. Sayyār]。

34) ササーン朝の軍人であり、ウマルを殺害したアブー・ルールーについては、本訳注(2)、421頁、注56も参照のこと。

35) 因果関係はよくわからないが、「ヒメハギ」のペルシア語 šīr には、「乳」の意味もあるため、掛詞になっているのであろう。もともとこの植物はギリシア語で「多量の乳 (polygala)」を意味し、現在のペルシア語では「乳をもたらすもの (šīr-āvar)」と呼ばれる。

卵の驚異は誰もが知っている。毎日鶏の〔腹の〕下から〔卵を〕1つ取り出し、割って観察しているのだから。雌鶏 (murǧ-i ḥānagī) は自分の卵を見分けられないほど愚かであり、水鳥の卵であっても抱えて孵す。孵ると雛は雌鶏のもとから逃げ出す。雛は〔自分が〕雌鶏の子でないとなわかっていて、〔雌鶏は自分が〕雛の母親でないことがわからずにその後を追う。

雌鶏は埃まみれの水を飲み、犬も埃まみれの水を飲むが、ハトとラクダはきれいな水を飲む。雌鶏は数が増えると、卵を産まなくなる。葉柄が密集したナツメヤシの木が実をつけないのと同じである。老いた雌鶏の卵には黄身がない。若い雌鶏の卵には黄身が2つある。丸い卵からは雄鶏が生まれ、細長い卵からは雌鶏が生まれる。雌鶏は、交尾、土、風、水の4つの要素で卵を産む。〔雨雲 (muḥīl)〕の近くにあるナツメヤシの木が、その風の下で実を結ぶように。

ある男がイブン・スィーリーン³⁶⁾に、「私は夢で1人の男を見ました。彼は卵を割っては白身を取り分け、黄身を残していました」と言った。イブン・スィーリーンが彼の耳元で、「おまえは〔そのように〕見たのか?」と尋ねると、〔男は〕「そうです」と答えた。〔イブン・スィーリーンは〕「おまえは墓を暴いて死者たちの衣服を盗んでいるな」と言った。〔男は〕「今後は決してそのようなことはいたしません」と悔い改めた。

知れ。卵を水の中に入れたときに、浮かんできたら〔その卵は〕傷んでおり、沈むならば正常である。(p.526) 太陽にさらし、赤い血管が見えると傷んでいる。1羽の雌鶏で500羽の雛を孵そうと望むならば、20個の卵を雌鶏の下に置き、雌鶏の向かいに500個の卵を数か所に分けて置く。乾かしてふるいにかけて糞の中にそれらを隠す。そして、それぞれの卵と卵の間に1枚ずつ雌鶏の羽を置いて〔卵が〕互にくっつかないようにしてから、糞ですべてを覆う。3日目には〔卵を〕揺り動かし、〔それ以降〕毎日同じようにする。雌鶏が〔自分で温めていた〕卵が孵ると、これらの卵も孵る。1羽の雌鶏が500羽の雛を連れて歩く。大麦の粉をこねて細かくちぎって与えると、〔雛たちは〕これを食べて成長する。だが、この雛たちは卵を産むことはないので、〔食肉として〕殺してしまうより他にない。

私は、〔びっくりするような〕食卓がしつらえられたのを見たことがある。食卓の半分は調理された卵の白身で占められており、もう半分は黄身であった。その重さは5マンほどもあった。私は、これは何の卵なのかと驚き仰天した。これについて調べてみると、〔次のとおりであった。〕300個の卵から白身と黄身を別々に分け、すべての黄身を1頭の羊の胃袋に詰めて口を閉じる。これを水に入れて煮込み、茹であげる。そして丸くなった黄身をそこから取り出す。別の羊の胃袋に白身を詰め、〔黄身を〕その中に入れ、もう一度水に入れて茹でる。そうすると、白身が黄身を包んで茹であがる。その後、〔羊の胃袋から〕取り出して、ナイフで2つに切り分ける。

ここではこの程度のことを述べておこう。そうすれば、こういったことについても知ることができよう。

<シャコ (鷓鴣) (durrāj)>

シャコは賢い鳥で、北風によって肥え太り、南風によって病気になる。地震が起きるときには、シャコは人々に知らせるべく鳴き声をあげる。その後、〔実際に〕地震が起こる。これは驚くべきことである。

36) アラブの著名な夢解き人。詳しくは本訳注(2)、430頁、注78を参照のこと。

<キジ (taḡarw) >

キジは優美で飾り立てられた鳥であり、珍しい色をしている。[その色は] 聞いただけでは理解できず、実際に目にするより他にない。非常に美しい目をしている。クジャクよりもはるかに美しく、華奢で (p. 527) 優美である。地上に暮らすいかなる野獣もキジを捕まえることはできない。[捕まえることができるのは] 空を飛ぶものだけである。タカはキジに狙いを定めると、胸で攻撃を仕掛け、木から飛び立たせる。その後、空中でキジを捕まえる。その [色鮮やかな] 装飾のために、誰も [キジを] 鳥だとは思わない。マーザンダラーン地方や温暖な土地にいる。

「谷のサンゴ (ḥurūhak-i darī)」と呼ばれる [別の美しい] 模様を帯びた鳥がいる。その鳥の爪ひとつに千の文字や絵が描かれているほどである。

<カモ (baṭṭ) について >

カモは稠密 [なため鈍重] で、非力な鳥である。獵師によって簡単に捕らえられ、タカの爪で死んでしまう。

ある獵師が次のような話をした。いわく、「私は、[次のような方法で] 100羽の水鳥を捕まえた。[まず] 大きなヒョウタン (kadū) を水の中に投げ入れた。ヒョウタンは水面を漂った。水鳥はそれを目にするうちにやがて慣れていった。その後、私はヒョウタンを引き上げ、その底に穴を開けた。私は頭をヒョウタンの中に入れた。それから両目の位置に穴を開け、その穴から覗きながら水の中を動き回った。そして水鳥を捕まえては、翼をへし折って水面に浮かべておいた。最後に [それら] すべてを引き上げたのだ。」

<逸話 >

ある商人が次のような話をした。「私は1羽の水鳥を目にした。その水鳥は水中に潜って魚を捕まえた。カラスが飛びかかり、水鳥から [魚を] 奪った。水鳥はしばらく鳴きわめいていた。[その水鳥は] もう一度潜って魚を捕まえた。カラスがやって来て奪おうとした。水鳥は飛びかかり、カラスの足をくわえたまま水中に潜った。そうしてカラスを殺してしまうと、水面に上がってきた。」

<ウズラ (salwā) について >

ウズラはシャームにいる鳥である。「天に属すもの (samāna)」である、と言う者もいる³⁷⁾。ウズラは天の方からイスラエルの民のもとにやって来た。ところで「マナ (mann)」とは木々にできる樹脂 (tar-angabīn) のことであり、ヘブライ語では「ゾリピヤ (ZLYBA)」と呼ばれる³⁸⁾。

(p. 528) <逸話 >

私はシルヴァーンから来た信頼できる人から次のような話を聞いた。彼いわく、「シルヴァーン

37) samāna は、「天 (āsmān)」の短縮形 samān に、類似を表す接尾辞 -a が付されたペルシア語。一方、この綴りはアラビア語で「太る」を意味する語根 SMN からの派生語 summān (もしくは summāna) と読むこともでき、その場合の意味は「ウズラ」となる。本文では後続の話との関連から「天に属すもの」というペルシア語による解釈を採用したが、単にアラビア語でのウズラの別称を紹介しているとも考えることもできる。

38) ここで、突然話題がウズラからマナに移っているが、その背景には以下のような旧約聖書の記述がある。すなわち、「夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降った。この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。『これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。』」[「出エジプト記」第16章13-15節]とあり、ウズラとマナの両者は深い関係性を持っていた。なお、マナとは、イスラエルの人々が発した言葉、すなわち「これは一体何だろう (mān)」を意味するヘブライ語である。

の境域で飢饉が生じ、長い間続いた。動物は死に、人々は途方に暮れた。3年後、その地方にまるで雨のように鳥が降り注いだ。それぞれの屋根に1億羽の鳥がとまり、荒野や山を覆いつくすほどであった。この鳥は飛ぶことができなかった。それぞれが黒スズメ (gunjišk-i siyāh) より大きかった。人々はできる限りそれを殺して食べた。また、塩漬けにして、いくつもの食料庫を一杯にした。こうして人々は苦境から逃れることができた。」

まことに創造主はしもべたちのことをお見過ごしになることはないのである。

このウズラ (summāna) はキンボウゲ (ḥarbaq) を食べて肥える。もし他の動物がキンボウゲを食べると死んでしまう。ウズラの肉は痙攣を引き起こす。

<天のカラス(からす座) (gurāb al-falakī)>

さて、天にいる鳥たちについてであるが、賢人たちは次のように言っている。[天の] 南極にカラスの姿(からす座)がある。それは9つの星からなる。アラブ人はそれを「ライオンの尻(‘ajz al-asad)」と呼ぶ。また、「武器を持たないスマーク(スピカ)の玉座(‘arš al-simāk al-a‘zal)」とも呼ばれる³⁹⁾。

<[天の] 雌鶏(はくちょう座) (al-dajāja)>

[天の] 北極には1羽の鳥の姿があり、それは「雌鶏(はくちょう座)」と呼ばれる。[そのうち] 4つの星は「騎兵たち(fawāris)」と呼ばれ⁴⁰⁾、「臀部(デネブ) (ridf)」はその後ろにある。

<[天の] オオワシ(わし座) (‘uqāb)>

[天の] 北極には1羽のワシの姿があり、それは「飛ぶハゲワシ(アルタイル) (al-nasr al-tā’ir)」と呼ばれる⁴¹⁾。翼を広げて飛んでいるようである。それは9つの星からなる。あるものは「2羽の雄ダチョウ(zalīmayn)」と呼ばれる⁴²⁾。一般には3つの星が(p. 529)「天秤(tarāzū)」と呼ばれる⁴³⁾。

また、この[天の北] 極には1本の矢がある。5つの星からなり、「雌鶏(はくちょう座)」の嘴の間にある。

<水汲み鳥(saqqa)について>

水汲み鳥は、スズメほどの大きさで、色鮮やかな鳥である。黄や赤や黒の羽をしており、利口である。人々はその鳥かごに紐を結ぶ。紐には小さい桶が結ばれている。その下には、水が一杯に入った鉢を置く。[水汲み鳥は] その紐を使って水を汲み上げる。嘴で[紐を] 引っ張っては足で押さえ、[桶を上まで] 引き上げると、[水を] 飲み干し、[桶を] 放す。

39) からす座を構成するβ星、γ星、δ星、ε星の4つの星のペドウィンによる呼称 [An Eleventh-Century Egyptian Guide to the Universe: The Book of Curiosities, Ed. and Trans. by Y. Rapoport and E. Savage-Smith, Brill, 2014, p. 540]。

40) はくちょう座のδ星、γ星、ε星、ζ星を指すが、このうちの最初の3つのみを指す場合もあったようである [An Eleventh-Century Egyptian Guide to the Universe, pp. 568–569]。

41) 通常「飛ぶワシ(al-nasr al-tā’ir)」と言う場合は、わし座のα星で一等星のアルタイルを指すが、ここでは星座そのものの名称として用いられている。

42) テキストでは TLYMAN であるが、『星座の書』の記述に従って、「2羽の雄ダチョウ」を意味する zalīmayn と読む [al-Šūfī, *Šuwar al-kawākib*, p. 112]。わし座のλ星を指すが、この星は現在では tālīmayn (サリマイン) と転訛している。

43) テキストに乱れがあるが、ma 写本および上掲注『星座の書』同箇所記述に従い、tarāzū (天秤) と読む。わし座のγ星(タラゼド)を指すか。

その帰巢能力は、驚くべきものである。

[別の水汲み鳥(ペリカン)]

ヒンドゥスターンには、大きな[水汲み]鳥がいる。幅広の口と、水袋(rāwiya)のように大きな喉袋(hawṣala)を持つ。水のない荒野に水を運んでくる。すると、無数の鳥がこの鳥のもとへやってきて、その嘴から水を飲む。[この水汲み鳥は]喉袋に水が入っている限り、口移しで与えてやる。[空になると]再び水を運んでくる。

知れ。鳥の中には[餌を獲得するのに、他者に]頼る鳥もいれば、[自ら]たくさん獲得する鳥もいる。さらに、コウモリやモグラ(huld)のように目が見えず、ただ口を開いて[待って]いるものもいる。口の中にハエが入ってくると、彼らはようやく餌にありつける。

ヒンドゥスターンの海では、海のただ中に枯れ枝で巣を編む鳥がいる。その巣は頑丈に作られている。その後、巣で卵を産み、およそ15日で雛を巣立ちさせる。創造主は、船を転覆させ破壊するような波から、この鳥をお守りになる。

<オウム(tūtī)について>

オウムはよく知られたヒンドの[鳥]である。[人々は人間の]言葉を知らないその鳥に、言葉を話すことを教える。オウムの声色は、人間の声色に似ている。「オウムは、言葉[を話す]ためにかごの中に捕らわれた」とたとえて言われる。

ハールーン・アル=ラシード⁴⁴⁾は、ある晩、庭にいた。1羽の鳥が鳴き声をあげた。彼はその鳴き声がした方にまっすぐに矢を向けて放った。矢はその鳥の胸に当たった。[このようにして]彼は鳥を殺した。ハールーンは言った。「鳥たちの沈黙も(p.530)また良し」と⁴⁵⁾。

[逸話]

次のように言われている。1羽のオウム(tūtāk)が捕らえられた。その鳥かごの上に、別のオウムがやって来た。[捕まっているオウムは、やって来た]オウムに言った。「ヒンドゥスターンへ行くことがあれば、私の友人たちに『私になし得ることは何か』と尋ねてくれ。」

そのオウムは[ヒンドゥスターンに]飛んで行き、オウムたちに、「これこれのオウムが囚われており、『私になし得ることは何か』と言っている」と伝えた。それらのオウムたちはみな落下して死んだ[ふりをした]。そのオウムは戻って、[鳥かごの中の]オウムに、「私は彼らに言づけを伝えたが、みな落下して死んでしまった」と伝えた。それを聞いたオウムも落下し、死んだ[ふりをした]。鳥かごの持ち主は、オウムが死んでいるのを見て、外へ放り出した。オウムは飛び立ち、ヒンドゥスターンの方へと去った。

この逸話が意味するところは、オウムは、しゃべっている間は捕らえられていたが、沈黙したときにこそ救いが得られた、ということである。

44) アッバース朝の第5代カリフ(在位786-809年)。

45) 本書巻末のミーノヴィー氏の訂正・注釈リストによると、この話の主人公はハールーンではなく、バフラーム・ゲールであったとされる。11世紀のペルシア語詩人アスアド・ゴルガーニーの『ヴィースとラーミーーン』の中でも「鳥たちの沈黙もまた良し」の句が詠みこまれている。

オウムは、[人が面と向かって直接] 教えようとしても、言葉を学ぶことはできない。そのため、オウムの目の前に鏡を置き、鏡の後ろに人が座って話しかける[とよい]。オウムは鏡の中を覗き込んで自分に似たものを目にすると、それによって落ち着き、言葉を学び始める。オウムは人を見ると逃げてしまう。

オウムの肉は心臓を固くすると言われている。オウムは[アラビア語で]「バブガー (babgā)」と呼ばれ、天国の住人 (biḥīstiyān) たる[鮮やかな]色をしている。オウムの身体は緑で、首のまわりは赤く、美しく着飾った鳥である。ザーバジュの国々⁴⁶⁾に多く生息している。極彩色で上手に飛ぶ。[この]鳥の羽[の枚数]は[天の十二]宮の数たる12であり、風切り羽は惑星の数たる7である。オウムは[めでたい]鳥であり、王たちの御前にいる。

<クジャク (tāwūs) について>

クジャクはヒンドの鳥であり、優雅に振る舞い、気取って歩く。頭の上に尾を持ち上げ、両側に開き、傘のように自らの頭の上に持ってくる。その表面には、驚嘆すべき絵柄や目玉模様や美しい色彩がある。この鳥は、創造主が世界で創造したものの中でも驚くべきものである。クジャクの色合いは濃いか半ば濃い目である。目にした者は、この鳥を創造した創造者が全知なる者であることを知る。これらすべて[の美点]にもかかわらず、クジャクは不快な鳴き声を発し、足は醜い。クジャクの特徴の1つは、毒入りの食物を見ると、(p.531) 大げさなまでの鳴き声で叫ぶことである。王たちがクジャクを飼っているのはそのためであり、クジャクは庭や調理場を歩きまわる。

クジャクの寿命は25年である。[クジャクは本来]上手に飛ぶが、尾羽が重いので飛ぶことができず、狩られてしまう。クジャクの雌は小柄で、雄が持っているような装飾は持たない。[季節によってクジャクの姿は]何種類かに変化する。秋に羽が抜け落ち、春になると羽が生えてくる。クジャクは、毎年1回卵を産み、30日間温める。クジャクの卵は雌鶏の腹の下に置かれても孵るが、その鳴き声は醜くなる。クジャクは「追い払う者 (tārid)」であり、[その声を恐れて]虫や、とりわけ蛇が逃げだす。

<サケイ (沙鷄) (qatā) について>

サケイは[ペルシア語で]「エスパフルード (ispahrūd)」と呼ばれる鳥である。アラブ人はサケイの利口さをたとえに用いて、「彼はサケイよりも道を踏み外さない者だ」と言う。サケイは沙漠の中の土中に卵を産む。[その後親鳥はどこかへ行き、]数日後に戻ってくると、卵を抱える。サケイは歩きながら眠る。しかし意識はしっかりしており、少しでも音を聞くと飛んで行ってしまふ。

<ツル (kurkī) について>

ツルは[ペルシア語で]「コラング (kulang)」と呼ばれ、よく知られた野鳥である。ツルが卵をどこに産むのかは誰も見たことはなく、その越冬地がどこなのかも明らかではない。春に雛鳥とともにイラクにやって来て、秋に戻っていく。私があるとある本で知ったところによると、周海に1つの四角い岩があり、冬にはすべてのツルがそこに集まり、その岩の上で卵を産む。

ツルには1羽のリーダーがおり、群れの先頭を行く。他のツルたちはリーダーの後を飛んでいく。つがいの片方が死んでしまったり、どこかで捕まったりすると、その連れ合いは激しく嘆き叫ぶ。そして[群れは連れ合いをなくした]そのツルをリーダーにする。また、「つがいの1羽が死ぬ

46) マラッカ海峡の国であったザーバジュについては、本訳注(4)、496頁、注82参照。

と (p.532)、[もう1羽は] 食べ過ぎて、やがて死んでしまう。別離に耐えられないからである」とも言われる。

空を飛ぶ[ツルの]群れは、大抵アーチ型になる。夜は水辺にとまり、片足を水に入れて[完全に]眠り込んでしまわないようにする。1羽が見張り役になり、片足を上げて眠らないようにする。[見張り役は] 敵を見つけると声をあげる。疲れてくると[その見張り役は] 眠り、別の1羽が見張りをする。

[種を食べる鳥については] この程度のことを述べておこう。次に、信頼に足る様々な書物の中で私が調べた奇妙な鳥や珍しい鳥たちに関する章をしたためよう。

【第3章】 世界各地の珍奇な鳥について

あらゆる鳥たちの中でも、アギーニールス鳥 (Agīnīlūs)⁴⁷⁾ は驚くべきものである。トゥルクスターンにおり、芳香を放つ。この鳥がいる地方にはシナモンがない⁴⁸⁾。その地の隊商は、長い期間をかけて危険な海域をいくつも通らざるを得ない。この鳥はヒンドゥスターンへと飛んでいき、シナモンを運んでくる。そして巨木の上に[そのシナモンの木で] 自らの巣を作り、そこで産卵する。その地方の帝王はこの木のことを[人に] 委託し、雛が孵るまでは誰もその鳥を襲わないようにする。その後、人々は矢尻に一塊の鉛をつけて、鳥の巣に放つ。するとシナモンが落下してくるので、人々はそれを持ち帰る。鳥はもう一度巣を作る。この鳥は「バンハス (BNḤS)」とも呼ばれる。またルームの人々は「アウクトゥース (A'QTWS)」と呼ぶ⁴⁹⁾。

マシュリク (東) の境界にある「太陽の町 (madīna al-šams)」と呼ばれる町には、夜が来ない場所がある。この鳥は雄[のみ]であり、雌はいない。賢人のティモテオス (Timōt) ⁵⁰⁾ は「この町の人々は太陽を崇拝している」と言っている。この鳥が雛をつくることを創造主が望まれると、[雄は] シナモンを集め、力強く、すばやく翼を羽ばたかせる。すると、翼の下から火が燃え上がる。火はシナモンを燃やし、この鳥もまた (p.533) 炎の中で焼かれてしまう。その後、春になって灰に雨が降ると、[灰から] 数匹の蟲が現れる。それは成長するにつれて羽が生え、アギーニールス鳥になる。鳥はその木にとまり、シナモンを運んでくる。この鳥の寿命は500年である。遠く離れた地域のことにもかかわらず、この鳥は我々にもよく知られている。

47) フェニックスを指していると考えられる。なお、lā 写本ではアウニークス (A'NYKWS) となっている。『動物誌』では AGTYWLS と綴られており、本書の以下の内容とよく似た記述がある [Jāhīz, *Kitāb al-ḥayawān*, vol. 3, p. 515]。アギーニールス、アウニークス、AGTYWLS はいずれも、もともとはギリシア語のフェニックスを *finikūs* などと綴っていた単語から変化したものであろう。

48) アギーニールスがシナモンで巣を作るという話は、本訳注 (6)、559 頁で既出。

49) バンハスは、ma 写本ではバンジャス (BNJS) と綴られている。これらもまた「フェニックス」から変化した語と考えられるが、古代エジプトにおける不死の鳥「ベンス」からの転訛という可能性もある。また、アウクトゥースは、本文および前掲注にあるアギーニールスやアウニークス、AGTYWLS と同じく「フェニックス」から転訛したものと思われる。なお、ペルシア語ではフェニックスは *quqnūs* と綴られる。ペルシア語作品ではフェニックス (不死鳥) の話はほとんど見られないが、唯一、本書とほぼ同時代のアッタル (1221 年頃没) が「魅惑的で不可思議な鳥、不死鳥 (quqnūs)」とその詩の中で取り上げている。アッタルの詩では、ヒンドゥスターンに暮らし、雌もなく子もない孤独な不死鳥の寿命は1000年で、死期を悟ると薪の中に入り、翼から火を起こして自らを焼き尽くす。そしてその灰から新たな不死鳥の子が誕生する、というものである [アッタル「鳥の言葉——ペルシア神秘主義比喩物語詩」(黒柳恒男訳)、平凡社東洋文庫、2012年、131-133頁]。

50) ティモテオス1世 (Timotheos I) は、アッパース朝初期のネストリウス派総大司教 (在位780-820年) であり、アッパース朝宮廷におけるギリシア哲学や医学の受容に深く関与した [高橋英海「アレクサンドリアからバグダードへ——学知の経由地とイスラーム世界での学知の受容におけるその影響」『中世思想研究』51、2009年、141頁]。

<ベルベルの鳥>

ベルベルの境域には1000種類の声色を使い分ける鳥がいる。[他の鳥たちが鳴き声を]この鳥に教える。毎日、自分によく似た姿をした20羽の鳥を引き連れている。すると獵師は[本物のベルベルの鳥がわからず、後ろにいる別の]鳥たちを捕まえる。すると、この鳥は立ち去り、[新たな]別の鳥たちを連れてくる。

<ジャラシュ(Jaraš)⁵¹⁾の鳥>

ジャラシュの鳥とジューンカラク鳥(JWNKRK)は、2種の海鳥である。ジューンカラク鳥はジャラシュの鳥の後を飛び、ジャラシュの鳥の両足の間に入り込む。ジャラシュの鳥は苦痛を感じて糞をする。ジューンカラク鳥は、糞がひとかけらも地上に落ちないように口にくわえ、満腹になる。ジャラシュの鳥は強靱な鳥であり、餌をかぎ爪で獲る。一方、ジューンカラク鳥は弱々しく、栄養をジャラシュの鳥の糞に頼っている。

[中国にいる鳥]

中国には「吉報をもたらすもの(bašīr)」と呼ばれる鳥がいる。[この鳥は]安価な物品と高価な物品に対して2種類の鳴き声を使い分け、中国の人々はその2種類の声色を聞き分ける。このことはよく知られている。

<ハザル⁵²⁾の巨大な鳥>

ハザラーンの境域には、象ほどの大きさの水鳥がいる。人をさらい、ロバや牛を空中に引き上げては落とす。

ある商人が次のように語った。「私はハザラーンの境域にいました。岸辺を眺めていると、荒野にいくつもの天幕(hargāh)が動いているのが目に留まりました。私がおの場所を目指すと、(p. 534)天幕が一斉に空中に上がり、海の向こう岸に降りました。その地方の人々に[それについて]尋ねたところ、彼らは次のように答えました。『あれは天幕ではなく鳥だ。海からやってきて岸辺をうろついている。1羽がドームほどに大きく、我々の土地に甚大な被害を与えているのだ』と。」

<逸話>

ある商人が次のように言った。「我々は周海の岸辺にたどり着きました。海岸に巨大な石がいくつも落ちているのを目にしました。石は水晶のようで、どれも球形でした。私はその石に驚きました。そのうちの1つを放り落とすと、石は割れました。[中から]たらいほどの大きさの黄身が出てきて、白身が流れ出しました。潜水夫たちは、これは水中に暮らす動物の卵だと言っていました。」

この卵はラクダの背に積まれて、アシュカーン家の国土にもたらされたとも言われている⁵³⁾。

<ダマーヴァンド(Du[n]bāwand)にいる巨大な鳥>

51) ジャラシュはヨルダン北部の町。古代ギリシア・ローマ時代にはゲラサと呼ばれており、デカポリス(シリア南部の10都市)を構成する都市の1つであった[*EP*: *Djarash*]。

52) ハザルはカスピ海を指す。ハザラーンはその複数形で、本書ではカスピ海付近にあった防壁の名称として用いられているが、本来はカスピ海一帯を指すのだろう[本訳注(4)、410、486頁]。

53) 「アシュカーン家」とは、歴史的にはアルサケス朝(バルティア)を指す[本訳注(5)、388頁、注127]。なお、この卵に関する逸話は、本訳注(8)、300頁に既出である。

[ダマーヴァンドの山には] 大きな鳥がいる。それぞれが羊ほどの大きさであり、人里にはいない。ムハンマド・ブン・イブラーヒーム (Muḥammad b. Ibrāhīm) は言う⁵⁴⁾。

マームーンはムーサー [・ブン]・ハフス (Mūsā-yi Hafṣ) ⁵⁵⁾のもとに人を遣わし、ダマーヴァンドの山へ行き、ザッハーク⁵⁶⁾の状況を見てくるよう [命じた]。[ムーサーは] 次のように語った。「そこへ行くと、山の頂上に白い大きな鳥たちがいるのを私は見ました。また、木々ほどの大きさの虫が雪の中にうようよと蠢いているのを見ました。先述の鳥たちはその虫の外皮を [割いては] しきりについばんでいました。虫が割かれる度に、[中から] 水が溢れ出てきました。しばらくして、私は老人に会いました。老人は『もしもおまえがザッハークに会いたいなら、私について来い』と言いました。老人とともに 100 アラシュほど進むと鉄の扉が現れました。扉にはいくつもの楔が打ち込まれており、楔のそれぞれにどれほどの犠牲 (nafaqa) が払われたのかが書かれていました。[老人は] 『このディーヴ (ザッハーク) はここに幽閉されている。災いが降りかかるのを恐れて、誰もこやつと関わりとうはしない』と言いました。我々はそれには手をつけず、そのままにして帰りました。」

[このように] 「ザッハークは人間ではなくディーヴである」と主張する者たちもいる。

(p. 535) <サラマンダー (samandar) について>

サラマンダーは炎の中にいる鳥である。水鳥が水の中にも、その羽 1 枚すら濡れないのと同様に、サラマンダーがかまどの中に入っても、その羽は 1 枚たりとも焼け落ちてしまうことはない。その皮から手拭いを作って手を拭き、[汚れたら] 火の中に投じる。すると、汚れだけが燃え、手拭いはきれいになる。1000 年もの間、火が燃え続ける場所にはこの鳥が現れると言われている。預言者——彼に平安あれ——が生まれたとき、この鳥の子孫は途絶えた。その後サラマンダーを見た者はいない。

< [ザンジバルの] 鳥 >

ザンジバルの境域にはジュズカケバト (fāhta) に似た鳥がいる。この鳥の主食は蛇である。[この鳥は] 蛇をさらって [空中から] 落とし、蛇が死ぬと、食べる。

< [サバラーンにいる] 鳥 >

バーバク⁵⁷⁾の境域のサバラーン⁵⁸⁾には、カラスに似た鳥がいる。人々がこの鳥をノウルーズの日以外に目にはしない。

< [シャラーヒトの] 鳥 >

シャラーヒトの鳥⁵⁹⁾には、「海の案内人 (dalīl al-bahr)」と呼ばれる鳥がいる。海岸にとまってお

54) この話の典拠は、イブン・ファキーフの地理書であろう。ここではヒジュラ暦 217 年 (西暦 832/3 年) のこととして同様の話が挙げられ、鳥の大きさはラクダほどとされている [Ibn Faqīh, *Muḥtaṣar kitāb al-buldān*, pp. 276-277]。

55) マームーン治世の 822/3 年にタバリスターンとルーヤーン、ダマーヴァンドの総督に任命された人物 (826/7 年没) [Tabarī, *Tārīḥ*, vol. 4, pp. 624, 635]。

56) イランの伝説上の暴君。ファリードゥーンによって討伐され、ダマーヴァンドに幽閉された。本訳注 (2)、420 頁、注 49 を参照。

57) バーバクは 9 世紀前半の反アッバース朝運動の指導者 [本訳注 (5)、394 頁、注 158]。「バーバクの境域」とは、彼が活動したアゼルバイジャンを指す。

58) アルダビールの西方にある山。標高約 4800 メートル。

59) マラッカ海峡からアンダマン海の島のいずれかを指す。本訳注 (4)、492 頁、注 56 を参照のこと。

り、船が針路を誤ると、この鳥が鳴き声をあげる。そこで船は誤った針路から立ち戻り、[正しい]針路を進む。

<[カルキースィヤーの]鳥>

カルキースィヤー⁶⁰⁾の境域には白い鳥がいる。赤いとさかを持ち、美しい鳴き声をあげる。火を好み、火のまわりを回る。あらゆる動物が火を好む⁶¹⁾。この鳥は「火を崇拝する者(‘abid al-nār)」と呼ばれている。

<鳥>

「グルヌーク(garāniq)⁶²⁾は色彩豊かな鳥であり、東の方からやってきてナイルの岸にいる。彼らはゴグやマゴグと戦う。「グルヌークは水鳥であり、用心深さによって特徴づけられる」と言われる。[この鳥は]夜眠らない。空にいるときには長い木の枝を嘴にくわえ、獐猛な鳥たちが恐れるようにしている。[それゆえ]この鳥は用心深いものたたとえに用いられるのである。

<ハッカ(白鷗)(farfir)について>

中国の海の向こう側にいる鳥である。白い鳥で、(p.536)黒い石の上にとまっている。この石のことを「バーハト(bāhat)」と呼ぶ。この石を見た人はみな、笑いすぎて死んでしまう。だが、もしハッカが石の上にとまっていれば影響はなく、隊商は通り過ぎる[ことができる]。この鳥を殺した者は、死の危険に直面するほど泣き続ける。

<[ファーヴァザーン]鳥>

ファーヴァザーン鳥(FAWZAN)は危険な海域に卵を産む鳥である。海のただ中で、卵は14日で孵る。その鳥が姿を消さない限り、船は安全である。その間は「ファーヴァザーン(FAWZAN)」と呼ばれる。この鳥がいなくなると、船は係留され、誰も海に漕ぎ出そうとはしない⁶³⁾。

<[カイラワーンの]鳥>

カイラワーンには、刃物では殺すことのできない鳥がいる。[この鳥を殺すには]石を用いるしかない。中国にいるジャラウ(JLW)に似た鳥も同様である。[その鳥は]炎に包まれても燃えないが、水によって死ぬ。

<[タバリスターンの]鳥>

60) イラク北方のジャズィーラ地方の都市[本訳注(4)、501頁、注114]。

61) このままでは文意が不明である。原文は、否定形の「あらゆる動物は火を好まない」か、あるいは「カルキースィヤーのすべての動物は火を好む」と考えるべきであろう。

62) グルヌーク(複数形はガラーニーク)はツルやサギといった渡り鳥を指すようだが、この鳥が本書の「珍奇な鳥」の項に挙げられているのは、ムハンマドが悪魔にそそのかされて伝えた「悪魔による啓示」と呼ばれる章句の中に「ガラーニーク」(英訳では crane)にまつわる句があるためであろう。『クルアーン』星章(第53章)第19-20節「あなたがたは、アッラトとウッザーを(何であると)考えるか。それから第3番目のマナートを」に続けて、「これらは高貴なツルたち(garāniq)、彼女らのとりなしは期待できる」という文言があったが、ムハンマドは即座にこれは悪魔によるまやかしたと気づき、この句を取り消したとされる[Encyclopaedia of the Qur’ān: Satanic Verses]。

63) 写本によっては、lā 写本のように逆で捉えるものもある。同写本では、この箇所は「この鳥の姿が見えない限り船は安全であるが、現れると、船を止め、誰も漕ぎ出そうとはしない」となっている。

「新芽鳥(kungur)」⁶⁴⁾はタバリストーンにいる鳥である。春になると現れる。この鳥が現れると、スズメたち(‘aşāfir)がその後をついて行く。その鳥は、すべて[のスズメ]と口移し[の交尾](zuqqa)をする。夜になると、1羽をさらって食べてしまう。春が過ぎると[新芽鳥は]いなくなる。アリー・ブン・ラッバン(‘Alī b. Rabban)⁶⁵⁾は、「この鳥はジュズカケバトほどの大きさで、オウムの尾のようなかぎ状の尾を持つ」と言っている。

<[マーワラーナフルの]鳥>

カユーカル鳥(KYWKR)はマーワラーナフルにいる鳥である。この鳥と出くわした鳥は、必ずこの鳥と交尾する。この鳥の[血を引く]卵が産み落とされると、その後ろをついて行き、嘴で突いてその卵を駄目にしてしまう。ふしだらな女はこの鳥にたとえられる。雄は弱く、雌はより美しい。その不埒さゆえに非難される鳥である。

<鳥>

[ホタル(yarā‘a)]は、夜に流星のごとく空を飛ぶ鳥である。昼に飛んでも火は発しない。

奇妙で珍しい鳥については、この程度のことを述べておこう。[ここで]鳥の捕獲法について言及しよう。

[鳥の捕獲法]

青スイレンの種(habb al-nīl)とバイケイソウ(kundusa)をすり潰し、ヤギの尿で湿らせ、それを(p.537) ヒヨコマメ(himmi)のように丸めて木の根元で火にくべると、煙が鳥たちのところに届き、すべての鳥が下に落ちてくる。この[丸薬]を焚く者は、鼻をつまんでおく[べきである]。さもなければ、害が及ぶ。落ちた鳥は水をかけると意識を取り戻す。

さてこの後は、卑俗な鳥について、その特性がどのようなものであるかを述べていこう。

[第4章] 不吉で小型の猛禽や小さな鳥について

[フクロウ(būm)について]

フクロウは[めでたさ]を[まったく]持ち合わせていない鳥である。フクロウは、様々なコウモリ(huffāš wa watwāt)やカラスやミミズク(jugd)のように夜行性であり、食糧を夜に探し求める。

64) テキストではKNKR、īā写本ではKKR、サーデギー本ではKNGRとなっている。いずれも鳥の名としては不詳である。kungurには「新しい枝」という意味があり、このことと本文の記述から類推してkungurと読み、「新芽鳥」と訳出した。

65) テキストでは‘Alī b. Zaydとなっているが、巻末の訂正表に従い、アッバース朝期の医者で著述家の‘Alī b. Rabban al-Tabarī(865年頃没)のことを指していると判断した。彼の父の名前については、ZaydやZayl、Zarin、Rabalなど様々なヴァリエーションがあるが、シリア語で「我らの師」を意味するRabbanが正しい。アリー・ブン・ラッバンは幼い頃、キリスト教徒であり医者であった父とともに故郷のホラーサーンからタバリストーンに、さらに成長してからアッバース朝の首都サーマラーに移住した。その地でイスラームに改宗した後、薬学書『英知の楽園(Firdaws al-hikma)』やキリスト教反駁の書など多くの作品を書き、第10代アッバース朝カリフ、ムタワキルから保護を受けた[Adan, C., *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible: From Ibn Rabban to Ibn Hazm*, E.J. Brill, Leiden, 1996, pp. 23–30]。なお、本書第5部に「アリー・ブン・ザッリーン(もしくはザイド)」という人物が登場しているが[本訳注(5)、427頁、注335]、彼も同一人物であると考えられる。該当箇所の注で、彼を『バイハク史』の著者に比定したのは誤りであるため、ここで訂正する。

[逸話]

あるアラブ人が2羽のフクロウを捕まえて売っていた。「いくらで売めるのか?」と聞かれ、「大きい方は1ディルハム、小さい方は10ディルハムだ」と答えた。「なぜだ?」と聞かれると、「なぜなら、こいつ(小さい方)は背を向けた(idbār) まま前を向いている(iqbāl) からだ」と言った。すなわち、その[小さいフクロウの]凶兆(šūmī)は前向きなもの(tāza)だからである⁶⁶⁾。

[フクロウは]夜、廢墟にとまる。カラスと敵対しており、その卵を奪う。蛇やマムシ(aḥī)はフクロウを恐れる。卵を2つ産み、1羽は毛を生やさせるが、もう1羽は抜いてしまう。経験則として、鳥を1羽ぶら下げ、毛が落ちれば、それは[毛を]抜かれた方である。フクロウは殺されると片目を開け、片目はつぶる。[生きている間も]その目は、片方が眠りに落ち、片方は夜どおし起きています。どちら[の目]が眠りに落ちるのかを知りたいければ、[フクロウを]水につける[と良い]。上側に来るのが眠らない方の目である。フクロウには2つの耳がある。呼び名は「ブーム(būm)」、「ハーマ(hāma)」、「サダー(ṣadā)」、「ジュグド(jūgd)」である。夜におぞましい声で鳴く。ジャーヒリーヤ時代の人々は、「死者の魂はハーマ(フクロウ)となり、墓のまわりをさまよう」と言っている。

<逸話>

オマーン出身のある男は言う。「私は、ある大きな屋敷の中にいた。その屋敷には、夜ごとハーマ(フクロウ)がやって来た。私は[ある夜、いつもとは]別のハーマがやって来る夢を見た。そいつに『おまえは誰だ?』と尋ねると、『われはアル=ワリード・ブン・アブドゥルマリク⁶⁷⁾のハーマである。彼はたった今、死んだ。私はバラフート⁶⁸⁾を目指している』と言った。夢から(p.538)覚めると、私は2羽のハーマを見た。私は日付を記録した。[実際]ワリードはその夜に死んだのであった。」

アブー・ドゥアード・アル=イヤデー(Abū Du'ād al-Iyādī)⁶⁹⁾は言う。

彼ら(人間)には死や死という運命が定められている

彼らには墓[に葬られた死者]の頭(ṣadā)の中にハーマ(hām)がいる

これは、初期の信仰(maḥab)である。

ところで預言者——彼に平安あれ——は、「殉教者の魂は、緑の鳥の素囊の中に住む。鳥は[天

66) アラビア語の文章は、フクロウが首を回して振り返っている様子を指しているのであろう。一方で、idbār と iqbāl にはそれぞれ「不運」と「幸運」という意味もあり、「こいつの不運は幸運の中にある」と、それぞれの単語が掛詞として用いられていると考えられる。

67) ウマイヤ朝第6代カリフ、ワリード1世(在位705-715年)。本訳注(5)、371頁、注41を参照のこと。

68) バラフートはハドラマウトにある洞窟で、不信心者たちの魂が集まる場所とされる。本書においても何度か言及されている[本訳注(4)、493頁;本訳注(5)、407頁]。

69) 校訂本では Abū Dā'ūd となっているが、ニスバなどからイスラーム以前のヒーラの詩人アブー・ドゥアードを指していると判断し、訂正した。アブー・ドゥアードは、ラフム朝のムンズィル3世[本訳注(5)、375頁、注61]の馬の飼育係を務め、動物の描写に秀でた詩人として知られる[EI: Abū Du'ād al-Iyādī]。ジャーヒズの『動物誌』にも、彼の詩が数多く引用されており、ここで挙がるものと同じ詩が見られる[al-Jāhiz, Kitāb al-ḥaywān, vol. 1, p. 272, vol. 6, p. 220]。なお、詩の中で「頭」と訳した ṣadā という語には、本文中にあるとおり「フクロウ」の意味もあり、ここでは掛詞として用いられている。また、同様に hāma にも「頭」という意味がある。アラブの言い伝えでは、ある人が死ぬと、その頭からフクロウが飛び立つとされていることから、両者の単語に上述の2つの意味があてられた。

の]玉座の下にあるランプに戻って[休む]と言った⁷⁰⁾。[すなわち、ペルシア語では]「殉教者の魂が緑の鳥の素囊に入ることがふさわしければ、惨めな者たちの魂はフクロウの素囊に入るのがふさわしい」[ということである]。

つまりは[フクロウは]一般的には非難される鳥であるが、害は少ない。

<逸話>

次のように伝えられている。

鳥たちがスライマーンに苦情を言った。「我々の中に、その名をフクロウ(būm)という鳥がいます。人里には行かず、アードムの子らの食べ物を食べません。長い耳を持ち、屋根の上にとまります。まじない(šūm)をかけ、墓地を居場所としています。」

スライマーンはこの鳥を呼び出して言った。「鳥たちがおまえに不平をこぼしておるぞ。」

[フクロウは]言った。「ええ。私は彼ら(人間)の中には入っていきません。彼らの妬みによる災いを避けるためです。なぜならば、『災いは人間と親しくなった者に与えられる』⁷¹⁾からです。また、アードムの子らの食べ物は食べません。腐ったものを私に投げつけてくるからです。彼らの食べ物を食べれば、それ以上に平手打ちを食らうことになりまじ、私は大いに辱めを受けることとなります。私は長い2つの耳を有していますが、これは[ものごとを]聞くためです。災いは話すことで見舞われることはあっても、聞くことでは見舞われません。私は屋根の上でまじないをかけていますが、『これらの城に驕るなかれ。おまえのもとに残ることもなく、おまえがその中に残るものでもないのだから』と言っているのです。私が墓場に暮らして言うのは、『おお、城の主よ。おまえは墓の主となったのだ』ということです。私が言ったことは正しいでしょうか。それとも間違っておりますか?」

スライマーン——**彼に平安あれ**——は言った。「おまえたち、この鳥を誹謗してはならぬ。知恵多きものであるがゆえに。」

この話の意図は、人々はこの鳥を軽蔑の目で見ているが、その真実[の姿]を知りはしない、ということである。

<コウノトリ(laqlaq)について>

コウノトリは卑俗な鳥である。長い首と長い足を持ち、どの地方にも存在し、(p.539)蛇を食べる。

ある人のいわく、「私は黒いカラスの卵を取り上げ、コウノトリの巣に置いた。雛が孵ると、雄は雌と喧嘩を始めた。ある日、雄は飛んでいき、また戻ってきた。数千のコウノトリが[雄と一緒に]やって来て雌を袋叩きにした。カラスが1羽やって来て、その雛をさらって自分の巣へと連れていった。くだんのコウノトリたちは鎮まった。」

この[話の]意図は、鳥たちの間でも[姦通という]墮落は褒められたものではない、ということである。

70) ムスリムの『真正集』「統治の書」に同様のハディースが収められている[ムスリム『日訳サヒーフ ムスリム』、第3巻47頁]。「アッラーの道のために殺害された者を死んだと思っはならない。いやかれらは主の御許で扶養されて生きている」[Q3: 169]という『クルアーン』の章句について尋ねられたムハンマドが、天国にいる殉教者の魂の様子を説明したものである。

71) マムルーク朝末期のエジプトの学者スユーティー(1505年没)が同じハディースを記録している[al-Suyūṭī, al-Jāmi' al-ṣaḡīr, p. 238]。

<逸話>

次のように言われている。ある者がコウノトリの雛を狙って[盗み]、家に連れ帰った。[すると]コウノトリ[の親鳥]が[その者の]家の周囲を飛び回った。それから[親鳥は一旦]飛び去り、1匹の蛇を運んできて、その家の中に[蛇を]投げ落とした。彼らは蛇に悩まされたために、コウノトリの雛を元の場所に戻した。

<ラハーム鳥(LĤAM)>

[ラハーム鳥は]よく知られた鳥であり、帝王たちが飼っている。この鳥は毒の匂いをかぎ分けると、声をあげる。[それによって]毒が盛られていることがわかるのである。

<[ムッカー]鳥>

さて、ムッカー(Mukkā)は鋭い声で鳴く鳥である⁷²⁾。ヒシャーム・ブン・サーリムは言う。「1匹の蛇がムッカー鳥の卵を狙った。[ムッカー鳥は]小枝を持ってきて、蛇の頭上を飛び回った。蛇は口を大きく開いた。ムッカー鳥は嘴にくわえていた小枝を蛇の喉に投げ入れた。蛇はそれがもとで死んだ。」

<[アルメニアの]鳥>

アルメニアには赤い鳥がいる。木々の天辺にとまる。この鳥の面白いところを見たいならば、雛に[黄色い]サフランをこすりつけ、巣に置くとよい。[すると]雌が雛を[巣から]突き落としてしまう。また、アルメニアには黄疸に効くバラがある⁷³⁾。この鳥はこのバラを持ってきて雛の前に置く。創造主はどの生きものにも理解力を授けておられるのである。

<ヤツガシラ(hudhud)>

ヤツガシラは美しく飾られた鳥であるが、悪臭を放つ。水から立ちのぼる蒸気を見ることができ

[逸話]

(p.540) スライマーン——彼に平安あれ——は、水の無い土地に降り立った。彼はヤツガシラを呼び出したが、[ヤツガシラはすぐには]やって来なかった。しばらくして[ヤツガシラが]現れ、言った。「私はサバーの地へ行っていました。私は一軍をともなった1人の女王(ビルキース)を見ました。彼女は太陽を崇拝していました。」

スライマーンは手紙を書き、ビルキースに届けるよう、ヤツガシラに託した⁷⁴⁾。ビルキースは[手紙を受け取り、スライマーンに]服従するようになった。ヤツガシラは[スライマーンのもと]に戻ってきて言った。「おおスライマーンよ、あなたは水の上に降り立ったのに、水を探しているのか?」

[スライマーンが]地面を掘らせると、水が湧き出た。

72) ムッカーについては、ジャーヒズの『動物誌』に同様の記述がある [al-Jāhīz, *Kitāb al-ḥayawān*, vol. 7, p. 23]。

73) アルメニアの黄疸に効くバラへの言及は、本訳注(6)、567頁に見られる。

74) ヤツガシラとスライマーン、ビルキースの物語は、『クルアーン』の蟻章(第27章)参照。

イブン・アッパース⁷⁵⁾は、「ヤツガシラは地下にある水をも察知するのに、なぜ罨を見抜くことができずに、罨にかかってしまうのか」と尋ねられ、こう答えた。「[死の]運命が到来するときには、慧眼の持ち主ですら盲いるのだ」と。

知れ。これまで述べてきたことはヤツガシラの特性である。[スライマーンにとってのヤツガシラは]ヌーフのカラスやウザイル(‘Uzayr)⁷⁶⁾のロバ、[ウフバーン(Uhbān)]⁷⁷⁾の狼(di‘b)のようなものである⁷⁸⁾。

ヤツガシラは墓の上に[不潔なもの]で巣を作る。春、日の出の刻に口をあけると、体内からハエが出てくる。ヤツガシラのいる地はどこであろうと、大トカゲやケラ(zamīn-sunb)はいない。ヤツガシラの両目とカニ(harṣang)を乾燥させてすり潰し、太陽が昇る前に目に塗ると、水が湧き出る場所[がわかる]。立ちのぼっている蒸気が見えたなら、水が近くにあるので掘るとよい。ヤツガシラの眼球を枕の下に置くと、よく眠ることができる。

[あるアラブ人は]⁷⁹⁾「ヤツガシラがスライマーンから[冠羽(tāj)]を与えられたのはなぜか」と尋ねられたとき、「ヤツガシラが自身の母に示す敬意ゆえである」と答えた。[続けてその]アラブ人は次のように言った。「母鳥が死ぬと、ヤツガシラは母鳥を頭の上に載せた。この冠羽(qanza‘a)はその母の墓である」と。

ヤツガシラは老いると醜くなる。頭は大きい体が小さくなり、嘴は長くなるが翼は短くなる。だが若いころは優美である。ヤツガシラの肉は記憶力を大いに増進させる。これは経験によって知られていることである。

<カラス(gurāb)>

[カラスは]卑俗な鳥である。昼も夜も飛び、盗みを働く。木から果実をとって他の場所に隠すが、見つけれなくなることもある。預言者——彼に平安あれ——は、この鳥を「淫らな者(fāsiq)」と呼んだ。この鳥の卵は斑である。雄のカラス(kalāg)は雌の上に乗って交尾をしない⁸⁰⁾。雌が卵を温めている間、雄が雌の餌を運ぶ。雛が孵ると、ハエや蚊が雛の悪臭に群がってくる。雛はそれを食べる。(p. 541) いずれの鳥も雛が餌を取れるようになると雛を追い出すが、カラスだけは雛が大きくなるとそれまで以上に世話をする。

75) 7世紀の学識者。本訳注(5)、436頁、注374を参照のこと。

76) 『クルアーン』悔悟章(第9章)30節で、ユダヤ教徒が彼のことを「神の子」と呼び、神聖視していたとされる人物。紀元前5世紀後半に律法主義的ユダヤ教の基礎を築いたエズラや、『クルアーン』雌牛章(第2章)259節に登場する、神の力によって100年間死んだ後で甦った人物に比定されている。なお、11世紀以降のイスラームの神学者は、ウザイルがヘブライ語で下された神の言葉を改竄したとみなし、聖書が捏造されたものであると非難するようになった[*EI*: ‘Uzayr]。

77) ムハンマドの教友の一人、ウフバーン・ブン・アウス(Uhbān b. AWS)のこと。彼は羊飼いをしていたときに、羊の群れを襲ってきた狼と会話をしたとされる。のちにクーファに移住し、ムギーラ・ブン・シュウバ[本訳注(5)、455頁、注483]がその地の総督を務めていた時代に死去した[al-‘Asqalānī, *al-Isāba*, vol. 1, pp. 289–290]。イブン・ハジヤル(1449年没)が編纂したハディース解釈書によれば、ウフバーンは狼から預言者ムハンマドの存在を知らされ、彼のもとへ行行って改宗するよう勧められたという[Ibn Hajar al-‘Asqalānī, *Fath al-bārī Sarh Ṣaḥīḥ al-Buḥārī*, vol. 7, p. 4257]。

78) ヌーフとカラスについては、本文の「カラスの項」で後述されるとおり、ヌーフが大洪水の後、方舟から最初に放った動物がカラスであった。また、ウザイルとロバについては、復活がどのようなものなのか疑問に思ったウザイルに対し、神が彼の目の前で甦らせたのがロバであった[Q2: 259]。ウフバーンと狼については、前掲注を参照のこと。

79) 本文に主語は明示されていないが、同様の逸話を伝える『動物誌』の記述をもとに補って訳出する[al-Jāhiz, *Kitāb al-ḥayawān*, vol. 3, p. 510]

80) テキスト原文では、「雄が雌の上に乗る」と肯定形で記されているが、後出の箇所では、カラスの生殖器は嘴にあり、交尾は嘴を重ねるものであること、および「カラスがカラスの上に乗っているところを見た者はいない」ことなどから、この箇所は否定形で文意をとる。

カササギ(‘aq‘aq)は目につく場所に巣を作り、コウモリを恐れるがゆえにプラタナスの葉を巣に置く⁸¹⁾。コウモリが卵のそばを通ると、卵が腐ってしまうからである。カササギは真珠や宝石の首飾りを取ってきて巣に置くこともある。

様々な種類のカラスがおり、全身が真っ黒のものもいれば斑のものもいる。アラブ人はカラスを好まない。斑のものは黒いものより不吉である。牛やロバと敵対し、[カラスは]嘴でそれらの目を突く。

カラスの生殖[機能](šahwat)は嘴にある。象がつかんだり放したりする機能を鼻に持つと同様である。この鳥は交尾を嘴で行い、嘴を重ねること(zuqqa)で子が宿る。カラスがカラスの上に乗って[交尾して]いるところを見た者は1人もいない。[そのため]雄と雌を見分けることができない。この鳥は、その目つきの鋭さゆえに、忌み言葉(majāz)として「隻眼(a‘war)」と呼ばれる。蛇に咬まれた人を「息災な人(salīm)」と言ったり、盲人を「慧眼(bašīr)」と言ったり、[海の]危険な場所を「砂漠(mafāwiz)」と言ったりするのと同様である。カラスの雛は醜い。人々がある賢人に、「口で性交するのはどの動物か」と尋ねた。[賢人は]「私は知らない。だが、カラスの嘴は陰茎の代わりであり、[雌の]カラスの口に入れると子が宿る」と言った。

<逸話>

次のように伝えられている。ヌーフは大洪水の様子を確認しようと、カラスを送り出した。[カラスは]1つの死体を見つけると、その上にとまり、戻ってこなかった。[このため]不在者のたとえとして「彼はヌーフのカラスだ」と言われる。その後、ヌーフ——彼に平安あれ——の呪いがこの鳥に降りかかった。それゆえ、この鳥は人里にはほとんど住まわせてもらえない。

秋になると、この鳥はバスラのバターイフ湿地に現れる。すると、バスラのナツメヤシはすべて黒くなり、枝々は重くなる。だが実がなっているナツメヤシにはとまらず、収穫済みの木にのみとまる。カラスの嘴はつるはしのような[に鋭い]。ナツメヤシは房が弱いため、もし創造主がお守りにならなかったら、(p. 542) 1つの房も残らなかつたであろう。もっとも、[カラスは収穫前の]ナツメヤシの実をついばもうとしない。そうではあるが、ナツメヤシをたいそう好み、収穫が終わるとナツメヤシを求めて飛び回る。木の根元や割れ目に入り込み、乾いて枯れたナツメヤシの実を引っ張り出して食べるほどである。

夢に現れるカラスは「淫蕩者」や「裏切り者」を示す。カササギは「不遜さ」や「約束を守らないこと」を示す。

<スズメ(‘uṣṣūr)>

スズメは[ペルシア語では]「ゴンジェシュク(gunjišk)」である。卑俗で、害の多い鳥である。ネズミ(mūs)のようにいらいらさせる鳴き声をあげ、家を荒廃させ、肉や果物を傷めてしまう。スズメの骨は胃に害があり、胃を傷つける。スズメがいるところでは、常に蛇が[スズメを]狙っている。スズメの雛が病気になると、[親鳥は]敵を恐れて[雛を]追い出す。スズメと犬と去勢された者は、「足音が大きい(šiddat al-waṭ’)」という特徴がある。1羽のスズメが家の屋根の上を歩くだけ

81) カラスの項目であるこの箇所突然カササギが挿入されているが、おそらくはカササギもカラスの一種とみなされていたからであろう。なお、コウモリがプラタナスを恐れることについては、本書のハゲワシの項などでも触れられている。

で、その足音は下にまで響く。[それに対して]1頭の象が歩いても、足音はまったくしない。雛に[嘴で]ひと口ずつ餌を与えるが、嘴による交尾は行わない。雌は醜く、より恥知らずで厚かましい。雄には黒いあごひげがある。人々が去った家からは、スズメもいなくなる。

<鳥>

ムクドリ(zurzūr)は「カーティーラ(KATYLH)」とも言う。地面に降り立って足で歩くことはない。何も食わず、風から生活[の糧]を得ている。たとえるなら、ムクドリはハエのようなものである。春になると現れて世界中を覆うが、その後いなくなる。

<ツバメ(huttāf)>

[ツバメは]弱く、優美な鳥である。その鳥からは、いかなる害も蒙ることはない。毎年、ヒンドゥスターンから各地に渡ってきては、子を産み、育てる。そして[再び]ヒンドゥスターンへ去っていく。[しかし、途中で]海に落ちて死んでしまい、雛だけが[海を]越える。次の年、[その]雛が海を越えてやって来る。雛を産み育てると、[ヒンドゥスターンへと]帰っていくが、(p. 543) [途中で]死んでしまう。寿命が短いので、その鳥の邪魔をしようとする者はいない。美しい声をしており、[鳴くときには]最後の部分を[母音符号の]マッダ(madda)のように伸ばす。[ツバメは]100回鳴いても、1文字たりとも増減なく[まったく同じように鳴く]。いくつかの書物には、ツバメが[『クルアーン』の]「開端章」を読誦した、とも書かれている。また、[ツバメは]セロリ(karafs)を巣に置く。[ツバメは]蛇を恐れ、蛇はセロリに近寄らないからである。

ツバメの目をくり抜いた後、「太陽の泉(‘ayn al-šams)」と呼ばれる植物⁸²⁾を持って来て塗り込むと、[目は元どおりに]良くなる⁸³⁾。ツバメの目を[入れた包帯を]腕に巻くと高熱が治まる。

<コウモリ(huffās)>

[コウモリは、ペルシア語では]「シャブ・パレ(夜飛ぶもの)(šab-para)」である。日没時に現れ、蚊を捕らえる。目が[光に]弱いため、フクロウとコウモリはどちらもこの時間に飛び立つ。コウモリは子を口にくわえたまま飛ぶ。嘴はなく、口と鋭い歯を持っている。昼間はずっと水の中にいる。ハゲワシやオオワシや象と同じく、寿命が長い。コウモリは高齢であればあるほど、夜はより大胆であり、視力が増す。それゆえ、太陽が沈むころに活動しているコウモリは若く、月夜のコウモリは高齢である。コウモリが[一旦]子をくわえると、ロバの鳴き声を聞いたり、殺されでもしない限り、落とすことはない。コウモリはザクロヤクルミの天敵であり、これらの木に翼で[何度]も飛びかかる。ロバの鳴き声はコウモリにとって致命的なものであり、それによって死んでしまう。ハゲワシはコウモリを恐れる。コウモリの血は毛を抜けさせる。コウモリの目はくり抜かれても再び生えてくる。

[別種の「コウモリ」]

82) 本来「アイン・シャムス(太陽の泉)」とはカイロ近郊にある町の名前であり、その町には貴重種のバルサム園があったことが知られている。また、イスタフリーヤビールニー、イブン・スィーナールは、バルサムはアイン・シャムスでしか採れない、と記していることから[本訳注(6)、551頁、注8、9]、ここで「太陽の泉」と呼ばれている植物はバルサムを指していると考えられる。

83) 『歓喜の書』にも同様の記述がある。そこでは「ツバメの雛の目を針でくり抜いても、3日後には再び元どおりに見えるようになる。[中略]また、ツバメの雛の目をくり抜くと、[親鳥が]「太陽の泉」と呼ばれる植物を持ってくる。それによって良くなる」と記されている[Šahmardān, Nuzhat-nāma, p. 159]。

ブスト⁸⁴⁾には、羊ほどの大きさの「コウモリ(huffās)」と呼ばれる鳥がいる。2つの乳房と2つの耳を持ち、口と歯がある。乳房からは乳が出る。これらはすべてコウモリの性質に当てはまる。

猛禽や卑俗な鳥たちについてはこの程度のことを語っておこう。珍しい鳥について言及すると[さらに]長くなってしまう。

だが[1つだけ例を挙げると]、「アブー・ハールーン鳥(Abū Hārūn)」は大きな鳥であり、夜に鳴き声をあげて人々の涙を誘う。その声はたいそう不思議なものであり、ある人は[その声について]次のように語っている。「ある軍が敵を求めて進軍した。敵が逃げたので、その後を追って(p. 544)進んでいたのである。我々は山の中で堅琴の音と歌声を耳にし、[それが]敵[によるもの]だと考えた。軍がその荒野に入ると、2羽の鳥がいた。鳥は飛び去り、歌声は止んでしまった。人々は、[あれは]ジンたちの歌声だ、と言い合った。その後、[再び]例の歌声が聞こえてきたので、彼らはそれがアブー・ハールーン鳥[によるもの]だということがわかったのであった。」

<七変化鳥(būqalamūn)⁸⁵⁾>

「七変化鳥」はアイラーウィル(AYLAWL)の山の上にいる鳥である。その羽には、この世に存在するあらゆる色が施されている。夜明けにはある色をしており、昼間には[別の]色になる。キビ(arzan)を食べると気絶してしまう。

この程度のことを述べれば、創造主のお力を知るには十分であろう。[次に]第10部として動物たちについて述べていこう。

84) アフガニスタン南部の町の名称[本訳注(5)、395頁]。現在のラシュカルガーフに相当する。

85) ブーカラムーン(būqalamūn)は、現在では七面鳥を指す語だが、かつてはカメレオンや色が変化する布地に対して用いられた。「多色」や色を変える「七変化」を表す単語である。本文で説明される鳥は七面鳥ではないものの、色が変わるという特徴を持っていたため、この名称で呼ばれていたのであろう。